ダンジョンにキャロルが居るのは間違っているのだろうか？

ヴィヴィオ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シェム・ハとの戦いにより、全てを焼却して黄金錬成を発動したキャロル・マールス・ディーンハイムは消えるはずだったが、シェム・ハの力か、はたまた世界の真理を解き明かしたせいか、自らの身体を持って転移する。

そこは神々が地上に降り、眷属と共に過ごす神代の時代。キャロルはエルフナインや響達が負けたことを確信する（勘違い）。

神々に対抗し、オートスコアラー達を甦らせるためにダンジョンへと潜るため、キャロルはヘスティアファミリアの団長となり、冒険に旅立つ。

※出来る限りキャロルに近づけますが、完全には無理だと思うのでご注意ください。一応、オリ主みたくなるかもしれないのでタグを入れます。性格は大分丸くなっていると思われます。

※ベル君加入前にヘスティアファミリアに入るので、団長です。そうでないと準備期間が足らずにオートスコアラー達を出すのが遅くなるからです。

※一部キャラにはアンチが含まれます。ベートきゅんとか

オートスコアラー達とキャロルに感動したので書きます。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 8
第3話 …… 20
第4話 …… 29
第5話 …… 47
第6話 …… 62
第7話 …… 73
第8話 …… 81
第9話 …… 100
第10話 …… 112
第11話 …… 122

第1話

エルフナインにシェム・ハを攻略する方法を伝え、別れを終えたオレはこのまま消える。思い出を、存在を焼却して黄金錬成のエネルギーに変えて神の攻撃を防いだのだから当然だ。本来なら、オレとエルフナインの二人で担当するはずだったが、エルフナインの記憶からオレ自身が消えることが嫌だった。だからこそ、オレの全てを燃やし尽くした。だというのに、なんだこれは？

気が付けば何時の間にか何処とも知れぬ煉瓦作りの家が建ち並ぶ場所に居た。周りを見渡せば目に入るのは無数の人々。それが問題だった。普通なら人間だけのはずだが、明らかに人ではない外見の奴が存在している。まず、犬耳が生えた奴や長い耳が生えた奴。身体が小さいずんぐりむっくりした奴など色々だ。

それにどうやら、時代もおかしい。よもや、オレ達は敗退し、世界はシェム・ハによって神代の時代に巻き戻されたのだろうか？　あり得るな。いくら神殺しのアイツでも敗北したのか。

そうなると、この世界は巻き戻されたと考えるべきだ。バラルの呪詛がなければ相互理解はできるはずだ。これだけの種族が共存している理由も納得できる。だが、奴の目的は全人類を一つにして争うことのない存在へと作り変えることだったはずだ。この光景を見る限りでは巻き戻しはされたが、奴の目論見はかろうじて防げたとみていいだろう。オレが何故、助かったのか疑問だが、もしかしたら、エルフナインが何かしたのかもしれない。

わからないが、どちらにせよオレがやる事は一つだ。神を殺す。だが、オレ一人で埒外物理学を突破するのは難しい。まず必要なのはガングニールに代わる神殺しの哲学兵装だ。いや、それ以前にオレの手持ちはどうなっている？

「おい、退け」

「ああ、すまない」

道の真ん中に居たら邪魔になる。裏路地に移動し、置いてあった木箱に座りながら、改めて手持ちを確認する。まず、オレの姿は何時もの赤いワンピースを着ているだけだ。問題は他の手段だ。まずは錬金術で作成した亜空間を調べる。手を入れ、ケルト神話に於けるダーナ神族の最高神、ダグザの振るいし金の竪琴の聖遺物、ダウルダブラを取り出す。

試しに弾いてみるが、音も問題ない。ファウストローブも纏えるし、鋼糸魔弦は使えるみたいだ。とりえず、戦えるのでよしとしよう。問題はこれからどうするかだ。大まかな目標は決めたが、それに至る行程は多い。一人ではどうしようもないからな。

故にオートスコアラー達を甦らせる。あいつらには世話になった。今度は廃棄などせず、共に進もう。そうと決まれば拠点が必要だ。拠点を得るにも施設を作るにもお金を集めないといけない。そもそも、今の時代に使われているお金なんてないからな。

「やれやれ……数百年前に逆戻りか」

まあ、それはそれでいい。やり直せるのなら、今度こそ上手くやろう。まずは寝床の確保だ。

寝床になりそうな場所を探して移動していると、廃棄された朽ちかけている教会が見付かった。

「ふむ」

神を殺すオレが教会を拠点にするというのも皮肉が効いていていいな。それにステンドグラスやパイプオルガンは設置するつもりだ。チフォージュ・シャトーを作り直すのもいいかもしれないな。神を分解してしまえばオレ達の勝ちだ。

そう思いながら朽ちた教会の扉を開け、中に入るとやはりボロボロだ。とりあえず、長椅子をかなりの数を使って錬成し、ベッドを作成する。崩れ落ちてきてもいいように天蓋付きのベッドだ。警戒の為にダウルダブラを取り、ファウストローブを着て鋼糸魔弦を使い、トラップを仕掛けておく。寝ているところを襲われたらかなわないからな。

ベッドに入り、記憶を整理しながら考える。やはり、どう考えてもおかしい。何故オレは焼却されていないのか。

「すまない。起きてくれ」

何時の間にか眠っていたようで、声が聞こえて目を開けると目の前にこちらを見詰める黒髪をツインテールにし、両側をそれぞれ白いリボンで結っている女が居た。服装は胸元が開いたホルターネックの白いワンピースに、左二の腕から胸の下を通して体を巻き付けるように青いリボンを結んでいる。そいつは鋼糸魔弦によって宙吊りになっており、その大きな胸が揺れている。

「なんだお前は……」

「それはこっちの台詞だよ！　ここはボクの家なんだからね！」

「なに？　それは本当か？」

「そうだよ！　ボクはここを神友から譲り受け、ここで生活しているんだから！」

こんな廃墟の教会で生活しているとは思わなかった。これはオレの落ち度だな。ダウルダブラを鳴らし、鋼糸魔弦を解除してやる。すると、相手は床に落ちるので、手で掴んでベッドの上に落としてやる。

「すまなかった。こんな廃墟に誰かが住んでいるとは思わなかったので、オレの拠点にしようかと思っていた」

「うん、普通は住んでいるとは思わないよね」

「荒れ放題だからな。せめて瓦礫が片付けられていたら人が管理していると思ったのだが……」

「あ～ボクも来たばかりで、神友に確認してみたら、管理だけしていたみたいで、生活に使う地下室だけはちゃんと整えてくれたんだ」

「地下室があったのか。本格的な探索は起きてからしようと思っていたから、見逃していたな」

ベッドから出て、ダウルダブラを持ちながら扉へと向かう。

「そのベッドは宿代として売るなり好きにしてくれ」

「どこに行くんだい？　こんなところに泊まるんだ。行く当てはあるのかな？」

「ない。だが、どうにかしてみせる」
「それなら、ボクの眷属になってみないかい？」
「なに？」
　眷属だと？　コイツ、まさか……
「ま、待って！　なんでそんな怖い顔をしているんだ！　ボクは君に害を与えたりしないよ！　子供達は慈しむ存在だからね！」
「子供だと？　オレはこう見えて百は超えている！」
「嘘、本当だと!?　もしかして、その神の力を感じる金の竪琴はケルト神話のダーナ神族、ダグザの物だろう。つまり、君はダグザか！」
「いや、違うが」
「え、神様じゃないの？」
「断じて違う！　あんな奴と一緒にするな！」
「そうなんだ……じゃあ、君の名前は？」
「オレの名前はキャロル・マールス・ディーンハイムだ。そういうお前は誰だ」
「キャロル。ボクの名前はヘスティアさ！　窯の女神、ヘスティア！」
「ヘスティアだと……やはり神か」
　ヘスティア。ギリシャ神話に登場する女神の一柱で、炉や竈を司る慈母神であり、処女にして子守と家内安全の神といわれる特殊な存在だったはずだ。こいつが神の名を語る偽物でなければ本人だろう。また、シェム・ハのような事例から、異なる場所からやってきた連中の事を神として捉え、奴等が名乗った名前がそのまま神の名となったことも十分に考えられる。
「君は神に敵意や嫌悪感があるみたいだけど、ボクは誓って君達を害するつもりは一切ないよ。眷属に誘ったのだって、ボクの眷属になればここで一緒に住めるからさ。まだ誰一人としてボクの眷属はいないからね。ファミリアだって登録すらできていない。つまり、君が団長になるんだよ！」
「団長？　どういうことだ？」
「あれ、もしかして全然知らない？」
「ああ、オレは気付いたらここから少し離れた大通りに居た。死んだ

はずなのだがな」
「死んだだって！　もしかして、君はエインヘリヤルか！」
「エインヘリヤル？」
「神の力で蘇ったとか……」
「わからん。だが、詳しく嘘偽りなく話せ。さもないと斬り刻む」
「お、おおう……わかった。えっと、まずファミリアについて……」
　ファミリアとは、神の眷族とのことだ。下界に降りた神が恩恵と引き替えに、人々を集めて組織するもの。ヘスティアの場合はヘスティアファミリアとなる。ファミリアの主である神は主神と呼ばれ、主神の名を冠して呼ばれるというわけだ。
　ファミリアには探索（ダンジョン）系、商業系、製作系、医療系、果ては国家系なども存在するそうだ。規模や功績により、ギルドからＩからＳまで等級付けされ、等級が高くなるほど、ギルドからの月間徴税額も上がり、探索系の場合はＤ等級以上には遠征の強制任務（ミッション）が課せられるとのこと。
　続いて冒険者について。神の恩恵を得て戦う者たちの総称らしい。おおむね、この街、オラリオで迷宮に挑む者たちを指すそうだ。
　レベル１の冒険者は下級冒険者、Ｌｖ．２以上は上級冒険者と呼ばれ、上級冒険者はＬｖ．５以上が第一級冒険者、Ｌｖ．３と４が第二級冒険者、Ｌｖ．２が第三級冒険者と呼ばれる。レベルが１つ上がる毎に、ステイタスの基礎値の向上や発展アビリティを発現するなど、戦闘力に格段の差ができるらしい。
「つまり、オレを眷属にしたいと」
「うん。君は行く当てがないと言った。それなら、どこのファミリアにも所属していないのだろうと思った。もちろん、キャロル君が眷属にならなくてもここに居てくれていい。君の年齢はともかくとして、子供の姿なんだから、手を差し出すのは当たり前だ。ましてや、ボク達神にとって君も例外なく子供の一人だ」
「そうか」
　こいつの言っている事が何処まで本当かはわからない。だが、それが神代の法則だというのなら、ありえないことはない。埒外物理学の

世界になったというだけのことだ。問題はオレが眷属になるかどうかだ。確かに眷属になればメリットが多い。ダンジョンについても教えてもらったが、そこでならオレが欲しい素材も手に入る可能性が高い。

神の眷属になるなど、業腹だが……レイア、ファラ、ガリィ、ミカの素材を集めるためには必要だ。彼女達は命を賭けてマスターであるオレに尽くし、エルフナインも助けてくれた。なら、次に答えるべきなのはオレだろう。その為に神の眷属となり、利用すればいい。戦力が整えば殺してもいいし、神を解析して分解してもいい。どちらにしろ、錬金術師としては興味深い素材ではある。

「わかった。眷属になろう。ただし、条件がある」

「な、なんだい？」

「一つ。この場所の改造を好きにさせてもらうこと」

「それぐらいなら構わないよ。生活スペースだけはちゃんと確保してね」

「わかっている。二つ。オレが望むどのようなものにもファルナを刻み込んでくれ」

「わかった。でも、犯罪者とかは駄目だからね？」

「ああ、了解した。次に団長としての仕事だが、基本的にオレはこのファミリアに金はいれない。設備投資などに使わせてもらう。だから、自分の食い扶持は自分で稼ぐようにしろ」

「うっ……わかった」

「最後にオレの事を詮索しないことだ。これらを守ってくれるのなら、他に好きなように眷属を増やそうが、オレは関与しないし、そいつらの装備だって作ってやる」

「そんなことができると、普通は思わないけれど嘘じゃないんだよね……ああ、自堕落な生活が……」

「働け。言っておくが、オレは優しくないからな」

「うう、わかったよう……でも、このベッドは使わせてもらっていい？」

「構わない。どうせ移動させるつもりだしな」

「よ～し、じゃあ、ファルナを刻もうか。服を脱いでうつ伏せで寝てくれ」
「わかった」
　言われた通りに服を脱ぎ、肌を曝して寝そべる。上にヘスティアが乗ってきて背中に文字を書いていく。背中が熱くなっていき、身体に変な物が入ってくる感覚がするが……これが神の力か。肉体を改変し、才能を引き出して強化する力。使えるな。
「嘘、なにこれ……スキルも魔法も発現してるし……」
「見せてくれ」
「わ、わかった……」
　紙に映してもらったステータスを見るが、文字が読めない。地球上に存在するあらゆる言語を習得したが、知らないものだな。
「読めない。代わりに教えてくれ」
「わかったよ」

第2話

ステータスについてヘスティアに教えてもらった。レベル1なので基礎アビリティなるものは全て0でIとなっている。だが、スキルとして世界の真理を解き明かした者と鋼糸魔弦。

試しに意識して放ってみると何も起きない。ダウルダブラを亜空間から取り出して放ってみると鋼糸魔弦はファウストローブを着ずに使えた。あくまでもダウルダブラを装備している状況でないと使えないようだが……大きさを変えられるのだから、ペンダントにでもするか。金の竪琴であり、聖遺物でもあるダウルダブラを狙ってくる奴等は多いだろう。現状では撃退できるかも不明なのでペンダントとして服の下にでも隠しておこう。

「小さくできるんだ……」

「乗り物にもできるからな」

「あ～確かに色々な物を乗り物にするのは流行ってたな～」

「神にも流行りがあるのか」

「もちろんだよ。イシュタルも似たような物を乗っていた気がするし」

「アレはまた別だろう」

「そうだったかな？」

ベッドでオレの隣に寝転び、ゴロゴロしているヘスティアと話しながら、真理を解き明かした者について考える。こいつは錬金術に補正をかけ、必要なエネルギーを削減したりしてくれるそうだ。また、この時代にはない法則をオレに適応できるスキルでもある。こいつのお陰でフォニックゲインが使えるようだ。

魔法はオレの十八番である錬金術。ＥＸがついているのは当然だな。ファウストローブ・ダウルダブラは変身魔法としての扱いで、オレが本気を出すにはこれを着て歌わないといけない。黄金錬成に関してはエネルギーが足りなさすぎるので、現状では使用できない。錬

金術に関しても神代の時代となった現在では法則を解析するまでは前のように四大元素を同時に操るなどできはしないだろう。まあ、ダウルダブラの鋼糸魔弦が使えるだけましだな。
「ヘスティア、明日にでもオレはダンジョンに行ってみるが、お前はどうする？」
「いやいや、明日は一緒にギルドだよ。ダンジョンに行く前に手続きが色々とあるからね」
「ちっ」
「舌打ちしても駄目だよ。ダンジョンの入り口はギルドが管理しているからね。まずはファミリアの登録と冒険者登録が必要だ。これを終えたらギルドからアドバイザーがあてがわれるから、ダンジョンについて詳しく教えてもらえるからね。受けないと……」
「死ぬ可能性が高い、か。わかった。まずは大人しく受けるとしよう」
「それがいいよ。今日は寝ないかい？」
「ああ、そうだな」
「それで、このベッドで寝たいんだけど……」
「わかった。なら、オレは別の所で寝るとしよう」
「いや、同じ所で寝ようよ。広いし、大丈夫だよ」
「断る」
ベッドから離れ、椅子に座りながら眠りにつく。

気が付けば隣でヘスティアが抱き着いていた。ベッドで寝ると言っていたのにわざわざ横に来て、布団までかけたようだ。ただ、涎まで垂らしているのはいただけない。
とりあえず、ヘスティアを掴んでベッドに投げて入れておく。それから教会を軽く調べる。簡単に修理はされているが、隙間風が入るようなスペースが空いていた。流石に雨が入り込むことはないが、石材などでしっかりとした修理ではなく、木材による修理だ。
瓦礫を集めて術式を構築。木材も等価交換で材質を変化させて隙間風を埋める。ついでに風を操って埃も全部集めて材料にし、テーブルを作成する。

続いて地下室に入る道を見つけ、そこに降りる。調理台やシャワーを浴びるような場所はあった。それに硬いベッドと本棚、テーブルがあるぐらいだ。

拡張工事は必須だな。地下に研究室や工房も欲しい。チフォージュ・シャトーのような物ではないなら、全て錬成して用意できる。もっとも、ここにある道具の方が良い物もあるだろう。とりあえず、拡張工事を優先しよう。素材を買うにも沢山のお金が必要だ。どうやって稼ぐかだが、一つはダンジョンに潜ること。だが、これは素材を売らねばならない。錬金術の素材として使うのなら、できる限り売らない方がいい。もう一つはダウルダブラを使った吟遊詩人としての演奏だ。こちらでもお金は稼げる。最後に錬金術によって作成したポーションの販売だな。やれることは色々とあるから、順番にやってみよう。

「おはよう～」

「ああ、おはよう。ヘスティア。ベッドがあるなら、一人一つでいいだろう」

「それもそうだったね。でも、折角だから一緒に寝たかったんだよ」

「そういうのは他の眷属にしてやれ。オレは基本的に一人がいい」

「一人にはさせないぜ！」

「うざ」

「ちょっ!?　って、痛い痛いっ！」

ヘスティアの耳を引っ張って外に出る。目指すは冒険者ギルドだ。

◇

冒険者ギルド。オラリオの都市運営、冒険者および迷宮の管理、魔石の売買を司る機関とのことだ。この街の中心にあるだけあってかなり広い。人も多く、冒険者であろう奴等が動き回っている。

「こっちだよ」

「わかった」

幾つもある受け付けの一つでファミリア登録を行っていく。主神

の所にはヘスティアと書かれ、団長の所にはおそらくオレの名前が書かれた。文字が読めないのはいただけない。さっさと覚えるか。
「あの、このようなお嬢さんを団長にしても問題ないのでしょうか？」
「大丈夫だよ。彼女、見た目通りの年齢じゃないからね」
「なるほど確かに小人族《パルゥム》なら納得ですね」
　オレはクローンに記憶を転写して延々と生きて来たので、その小人族《パルゥム》とかいうのではない。だが、面倒だからそれでいいだろう。そのような些事にかまってはいられない。
「さて、これで登録完了です。続いてアドバイザーを呼びますね」
「頼むよ。それじゃあ、キャロル君。ボクはこれから仕事を探してくるから、後は任せるよ。少しだけど、これで食事を買って食べるといい」
　ヘスティアからお金を渡された。本当は借りを作りたくはないが、仕方あるまい。今のオレが持っているのはダウルダブラと身に纏うこの服。ファウストローブだけだ。アルカノイズも転移結晶も手元にはない。全て立花響達との戦いで放出したからな。
「ああ、わかった。ありがたく頂こう」
「ばいばい！」
　それからアドバイザーを紹介される。やって来たのは耳が長い眼鏡を掛けたハーフエルフの女性だ。
「はじめまして。私がヘスティアファミリアの担当となりましたアドバイザーのエイナ・チュールです」
「キャロルだ。早速だが、ダンジョンについて教えてくれ」
「わかりました。こちらへどうぞ」
　案内されたのは個室だ。そこでダンジョンで生き抜くために必要な膨大な知識を教えてもらえた。ただ、文字が読めないので、全て口頭で教えてもらうことになる。もっとも、文字の勉強ということで書かれている本を読んでもらい、本の文字と言葉を解析して辞書を脳内で作成。そこから暗記してこちらの文字をある程度は理解できた。
「テストをします。これに合格しないとダンジョンに行くのは認められません」

「そうか。なら、テストしてくれ。もう覚えた」
「かしこまりました……」
　渡されたテストを教えられた通り、一字一句間違えずに告げるとエイナは驚いていた。書くのは無理だが、どうにかなる。
「確かに全て覚えているようですね。まさか一度で全て覚えるなんて……凄いです」
「見た目通りの年ではないのでな」
「なるほど。ですが、一人では危険なのでくれぐれも気を付けてくださいね。本当は誰か他の人と組むといいのですが、できたばかりで団員が一人というのは……」
「問題ない。オレの仲間は今も昔も四人……いや、五人だけだ」
　仲間とは言えないかもしれないが、あいつらを勘定してやってもいいだろう。オレやエルフナインの為に命をはってくれたのだからな。エルフナインはオレのクローンであるし、こちらも仲間とはいえないかもしれんが……アイツのことだ。喜んで抱き着いてくるか。何か癪だな。やはりアイツは外そう。うん、それがいい。
「その方々は……」
「今は居ない。取り戻す為にもオレはダンジョンに潜る」
「それは……」
「詮索は不要だ」
「わかりました。それでは武器はどうなさいますか？　レンタルできますが……」
「自前のがあるから必要ない」
「かしこまりました」
　レンタル代金も馬鹿にならんし、自分で作った方が良いのができるはずだ。そもそも鋼糸魔弦を使うのだから、生半可な武器など必要はない。
「最後に冒険者は冒険しちゃ駄目です。無茶をすればすぐに死にますからね」
「ああ、オレなりに無茶はしないさ」
「わかりました。では、換金場所などを案内しますね」

「図書館みたいなのはあるか？」
「ええ、ありますよ」
それから、ギルドの内部を案内してもらい、必要な施設を教えてもらった。特にダンジョンの情報が載っている本が置かれているのはとてもありがたい。まだ読めないが。

◇

さて、冒険者登録も終えたので、適当に携帯食料を購入し、亜空間に収納してからダンジョンに入る。入った場所は普通の洞窟で、なんの驚きもありはしない。いや、光る苔が生えている。これは錬金術の素材や光源になるかもしれないから回収しておくか。
鋼糸魔弦で苔を切り落とし、亜空間に入れる。なにやら周りが驚いているが無視してそのまま進んでいく。
薄暗い洞窟の中、道を進んでいると気持ち悪い緑色をしたくさい物体に遭遇した。そいつはオレを見るなり息を荒げ、舌を出しながら飛び掛かってきたので思わず片手を振り上げて鋼糸魔弦で十六分割にしてやった。
「しまった。魔石も切ったか」
歌う必要もなく、あっさりと切断できた気持ち悪い生物。こいつはエイナから教えられた知識によればゴブリンだ。死体は魔石を壊すと塵になって消えてしまった。ドロップアイテムはなし。
これはもう進むしかない。この程度の雑魚なら相手にする必要はない。効率良く進むには……他の冒険者の跡をつけた方がいい。適当な冒険者を見繕い、そいつらが進んだ方向に向かっていく。するとすぐに階段が見付かった。
下に降りると、今度はゴブリン以外にもコボルトを見つけた。こいつは犬の化け物だ。襲いかかってくるので、手足を切断してゆっくりと鋼糸魔弦で解体していく。解体した一部を消える前に手に取って解析用の術式で調べていく。真理を解き明かしたせいか、簡単に解析できてしまった。

解析した情報で新しい術式を構築。錬金術を発動して身体を分解して魔石を取り出す。小さな物だが、これを解析して転移結晶やアルカノイズなどを作り出せば戦力を補えるかもしれない。

しかし、ドロップアイテム以外は魔石を除いて砂になるなど、非効率すぎる。ましてやドロップアイテムすら、確定で手に入れられる訳ではない。ならば、オレがやることは一つだ。ドロップアイテムが発生する原理を解き明かし、確定でドロップさせる。まあ、その前に行けるところまで行くか。この程度では金にもならんだろう。

地下を目指し、ひたすら進んでいく。急ぐように目標に向けて駆け抜けていく冒険者についていくだけだ。それにしても、オレと同じような身長の奴も居るから小人族とかいう奴か？

◇

五階層ほど進むと、急に奴等が立ち止まった。目的地に到着したのかとも思ったが、別の奴が不思議がっていることからここは目的地ではないだろう。

「そこに居るのはわかっているよ。出て来てくれないかな？」

「フィン？」

「やっとか。どうすんだ？」

どうやら気付かれているみたいだ。獣人と小人。それに金髪の少女。褐色の肌を持つ二人の少女。全員が武器を構えてこちらを見ている。正直、出ていくのは面倒だな。このまま下がるのもいいが、このままでは帰してもらえないかもしれない。また、ダンジョンに穴を開けるわけにいかない。

「出てこないね」

「しゃらくせぇ！」

獣人が近付いてくるか。予想よりも速い。対応はできるが、始末するのは後々問題もある。それにアイツの顔がちらついてくる。仕方

ない。出るか。
　前に向けて歩き出すと、オレが居る通路に突入し、蹴りを放ってくる獣人。オレは鋼糸魔弦でそいつを拘束し、動きを封じる。両手と両足を縛りつけ、蹴り転がす。
「くそがっ！　なんだこれ！　動けねぇ！」
「ベート！」
　全員が武器を構えてくるが、戦うつもりはないのでまずは会話からか。
「子供？　小人族？」
「黙秘する。それよりも、お前達の目的地はここか？」
「違うよ？」
　金髪の子供が答えてくる。他は警戒したままだが、先にこいつを返却するとしよう。もう一度蹴ろうとして……流石に蹴るのはまずいと思って転がしてやる。
「なんでそんなことを聞くの？」
「簡単な事だ。オレが楽に先へ行きたいからだ」
「え？」
「あ～もしかして、下の階層に行きたくてついてきたのかい？」
「それ以外に何がある。ここのモンスター共は弱すぎて金にもならん。なら、探索など面倒な事はせず、さっさと下に降りた方が効率がいいだろう」
「でも、それっておかしくない？　実力があるなら、普通は道を知ってるはず……」
「生憎と冒険者になったばかりだ。戦う事はできるが、ダンジョンの内部構造など知らん。故に知って居そうな奴を見つけてついてきた。お陰様でショートカットできた。感謝しよう」
「それってマナー違反だよ？」
「敵対と取られてもおかしくないわね」
「だが、効率を考えるとその程度は些事だろう。話して説得できるならよし、襲って来るのなら始末するだけだ。それに道が同じなら、こういうことは良く起こるだろう」

「なら、こちらから何もしなければ手を出さないと。ベートに対するのは自衛かな？」
「そうだ。だから、捕まえるだけで殺しもしていないだろう。暴れないと約束するのなら、すぐにでも解放する。逆に戦うのなら――」
　言外に殺すと伝えれば、小人族の男は武器を肩に置いて構えを解く。それにならって他の連中も武器を収めた。なので、オレも獣人を鋼糸魔弦から解放してやる。一応、警戒は解いていないが、戦う気はなくなったようだし、これでよしとする。
「さて、このまま別れるのも問題があるし、話をしようか」
「こちらには別にないが、下まで案内してくれるのならいい」
「いいよ」
「団長！」
「彼女はベートを拘束した実力者だ。このままついて来られるより、一緒に行った方が楽だ。もちろん、道中のモンスターは君が相手をしてくれ。簡単に倒せなくなる場所までなら、連れていってあげる」
「代価は話だけではないだろう？」
「道中の露払いでいいさ」
「それならいいだろう」
　合流し、先導を任せながら話しをする。しかし、約二名からかなり睨まれているな。
「まず、ボクはロキ・ファミリアの団長、フィン・ディムナ。小人族だ」
「オレはキャロル・マールス・ディーンハイム。ヘスティア・ファミリアの団長だ。種族は勝手に判断してくれ」
「私はティオナ！　さっきのベートを捕まえたのってスキル？」
「そうだ。糸を操るスキルだ。詳細は伏せるが、この糸がオレの武器だ」
「なるほどね～。あ、こっちは姉のティオネ」
「ティオネ・ヒュリテよ。団長に手をだしたら殺すから」
「ほう……面白い。興味はないが、やってみるかね」
「団長に興味がないですって！　なんでよ！」
「いや、どっちなんだ」

話しながらも、出て来たモンスターは鋼糸魔弦で切断し、魔石に糸を絡めて引き抜いてそのまま亜空間に収納する。
「何そのスキル！」
「こいつはスキルではないが、似たようなものだ。亜空間に物を収納できる便利な力だ」
「亜空間？」
「魔法なのかな。これは凄いね。どこまで入るのかな？」
「オレの力量次第だが、どこまで入るかは知らん。狭くなったら拡張すればいいだけだしな」
「……そうか。それなら、ボク等のアイテムも持ってくれないか？」
「確か、サポーターというのだったか。代金を貰えるのなら、構わん。だが、そちらでも記録しておけよ」
「もちろんだ」
獣人のベートも含めて自己紹介が済んでからロキ・ファミリアの連中の荷物を預かり、亜空間に収納する。手持ちは微かなポーションと武器だけだ。その状態で速度を上げながら進んでいくが……次第に追いつけなくなるので、鋼糸魔弦を先に放ち、壁に打ち込んで自らの身体を引き寄せさせる。これによって一時的な高速移動を可能とする。
「面白い移動方法だね！」
「試してみたが、意外にいけるな」
「そうなんだ。私も試してみていい？」
「面倒だから断る」
「残念。ところでヘスティア・ファミリアって聞いた事はなかったけれど、新しくできたの？」
「そうだ。今日登録した」
「なら、レベルは？」
「秘密だ」

◇

移動し、17階層に到着した。ここまでくると、オレは相手をせず、処理はロキ・ファミリアに任せている。さて、ここはティオナの説明によると、嘆きの大壁と呼ばれる場所らしい。一面真っ白の綺麗に整えられたような壁があり、そこから灰褐色の身体を持つ全長7メートルもある巨人、ゴライアスが出現するらしい。

「出たか。ボク達が狩るから、キャロルは待機してくれ」

「拘束してやろうか？」

「できるのなら頼む」

「分け前はもらうぞ」

「もちろんだ」

鋼糸魔弦で巨大なゴライアスを結び付け、固定する。しかし、鋼糸魔弦がどんどん引き千切られていく。どうやら、スキルで出しているこいつは強度不足のようだ。まあ、何重にも重ねてしまえばいい。オレが拘束している間にフィンやティオナ達がめった刺しにして倒すだけだ。

「これで勝利だな」

「おっきな魔石ゲット！」

「うん。じゃあ、先に進もうか。キャロルもいいよね？」

「構わない。金が欲しいからな」

それからしばらくダンジョンに籠り、八日目でオレ達は地上に戻った。食料は補充しながらなのでなんとかなったが、ロキ・ファミリアの武器が駄目になったからだ。フィンはオレが収納できる限界を試そうとしていたが、限界がくることはなかった。

「しかし、凄い収納力だね！」

「うん。これは是非とも遠征についてきて欲しいくらいだ」

「値段次第だな。運搬にかかる費用。その半分を貰えれば暇なら引き受けよう」

「うぅ、団長が取られるぅ……」

しかし、手に入れられた金と魔石はかなりのものとなったが、エイナとヘスティアに文句を言われた。その上、捜索依頼が出されそうになっていたそうだ。ただ、フィンから事前に連絡を入れられていたよ

うで、捜索依頼は取り消されたとのことだ。だが、それでも八日間も籠っているとは思わなかったそうだがな。
「もう、いきなり八日間も籠るなんて何を考えているんだい！　それもロキのファミリアとなんて！」
「都合が良かったからだ。嫌いなら利用すればいい」
「む、それもそうか。って、違うからね！　これからダンジョンに籠る時はしっかりと何時まで入る予定か教えてくれ」
「面倒だ」
「頼むよ。ボクを心配させないでくれ……」
　涙を流しながら告げてくる姿が、一瞬。エルフナインにかぶった。アイツも泣き虫だったな。
「わかった。今回入った金で色々と準備したいからな。ダンジョンに籠るのは少し後だ」
「そうか。それは良かったよ。まったくもう」
　必要な資材を買ってから、ホームに戻る。まず、やるのは地下空間の拡張だ。扉を用意し、術式を刻む。錬金術を発動し、亜空間を作成。必要なエネルギーはロキ・ファミリアから報酬の一部としてもらった魔石を使い、発動する。
　扉を開けた先は何も無い空間だ。そこに更に上下左右、重力などを定義して部屋を作成する。後は購入したテーブルなどを運び込めば簡易的な工房が完成だ。
　工房が出来れば転移結晶が作れる。移動するポイントはここに設定し、何時でも戻れるようにする。片道切符だが、それでも効率はかなり良くなるだろう。

第3話

ボクの始めて出来た眷属(子供)は規格外だ。アドバイザー君から口頭で教えてもらったら、直に覚えてそのままダンジョン行き、八日間もダンジョンに籠っていたんだ。

それもあのロキのファミリアと一緒に中層で狩りをしていたというじゃないか。しかも、ロキの子供達に彼女のスキルについてもある程度バレてしまった。

これに関してはボクの考えが至らなかったこともある。まさか、ダウルダブラを仕舞っていた空間が他にも物を入れられるなんて思わないじゃないか。

「いいかい、キャロル君。君のスキルはレアスキルと普通のスキルがある。いや、君が使うともう普通のスキルじゃないんだけどね」

ベッドに寝転がるキャロル君の上に乗ってステータスを更新しながら話をする。

「知っている」

「そうか、知っているのか……って、それならなんでロキの子供達の前で使ったんだい！」

「使う必要があったからだ。連中はそれなりの実力を持っていた。だったら金や資材、コネクションを持っているのだろう？」

「それはそうだけど……」

悔しい事にあのまな板はボクのファミリアと違って大手だ。資金力や資材、コネクションではボクとは話しにもならない。

「雇われる可能性を勘定に入れたら、別に使うのは問題ない。そもそも荷物を収納するなどそんなに珍しくもないだろう」

「いや、珍しいからね！」

普通に考えて、そんな馬鹿みたいな容量を重さも感じずに収納できれば、ダンジョンの探索はかなり楽になるだろう。ロキの子供達が目をつけるのも納得だ。

「まあ、知られてしまったのは仕方がないけど、基本的に糸とその収納

はスキルという事にしていい。錬金術も別に知らせていいか。錬金術は他の子達も発現している能力だし」
「他の錬金術師か。基本的に何をしているんだ？」
「調薬がメインだね。あとは鉱石を精錬したりかな。どちらにしろ、キャロル君みたいな事はできないよ」
「オレに追いつくのなら生半可な研鑽ではできぬだろう」
　実際にこの子、数百年以上も研鑽しているみたいだしね。まあ、気をつけるように言っておこう。
「ところで、ヘスティア」
「なんだい？」
「帰還用の転移結晶って売れると思うか？」
「売れるよ！　大騒ぎだよ！　作れるの！」
「作れる」
「止めてくれ、お願いだから。他の神にとって恰好の玩具にされるし、戦争遊戯（ウォーゲーム）をしてでもキャロル君を求めてくるだろう。そうなると、キャロル君は玩具にされるよ？　団長でもないから自由はないだろうし……」
「ほう、このオレを神々の玩具にすると。殺すか」
「待って、待って。お願いだから止めて！　大丈夫！　ボクが出来る限りは守るから。だから、キャロル君も気をつけてくれ！」
「わかってはいたが、色々と常識が違うな。オレ達錬金術師にとって、転移などできて当たり前の領域だったのだが……」
「いや、当たり前じゃないから」
　嘘じゃないんだよね。キャロル君が居たのはどんな魔境なんだよ。
「まあいい。では資金を稼ぐのは薬の販売と演奏、ダンジョンにしておくか」
「それがいいよ。ん？　演奏？」
「ああ、昔は歌が嫌いだったが、歌も悪くないかもしれないと思いだした。だが、まずは演奏技術を磨こうと思っている」
「ダウルダブラの演奏か。確かにお金にはなるだろうけれど、そのダウルダブラを狙って盗賊がきそうだね。その対策さえしたらいいよ」

「それなら考えがある。用はダウルダブラを見られなければいいだけだろう？　だったら、酒場などで隠れながら演奏すればいいだけだ」
「ん～それならいいかな？　薬の販売に関してはボクに心当たりがあるから、神友に聞いてみるよ。必要な道具があるなら買いに行こう」
「わかった。それならいいか」
　ステータスの更新が終わったけれど、全然の成長していない。中層のモンスターを虐殺していたにしてはだけど。基礎アビリティもまだIから出ない。キャロル君がレベルアップするのって、とっても大変なんじゃないかな？
「更新終わり。全然成長していないよ」
「そうか。まあ、そう簡単には上がらないだろう」
　キャロル君のレベルを上げるには深層に行くしかないだろう。そうなると、やはりロキのファミリアに頼るしかないのかな？
　でも、アイツに頼み事なんてしたくないけど……本人に聞いてみよう。
「キャロル君は急いでレベルを上げたいかい？」
「ん？　オレは別にそんな事は思っていないな。まずは設備を作る事が重要だしな」
「そっか。わかったよ」
　うん、しばらくは様子を見よう。キャロル君も無理に上げるつもりはないみたいだし。まずはミアハを紹介するぐらいかな。
「じゃあ、ボクとちょっとお出掛けしようか。ポーションを売っている神友がいるんだ。彼に頼んだらキャロル君が作ったポーションを置いてくれるかもしれないよ」
「商業ファミリアか。販売を委託できるのならありがたい。すぐにでも行くぞ」
「お～！」
　キャロル君をミアハのお店へと案内する。ついでにポーションを買って売り上げの貢献でもしてあげようかな。

さて、嫌がるキャロル君の腕を抱きしめてミアハのお店まで連れてきた。もちろん、抵抗されたけれど、行き先を知らないことを盾にして抱きしめてやったのだ。
「ここがボクの神友であるミアハのお店だよ」
ボクが案内したのは大通りの一角にある小さなお店。回復薬を扱う道具店・青の薬舗。エンブレムは、五体満足の人の体。ミアハはミアハ・ファミリア主神で、男神だ。借金のためにファミリアは没落しているけれど、借金を抱えているにもかかわらず、多くの知人にタダ同然でポーションをばら撒いたりしているんだ。ファミリアの経営は常に火の車らしいけどね。
「そうか。ならさっさと入るぞ」
「うん。ミアハ、居るかい？」
店の中に入るけれど、相変わらず人がいない。キャロル君はすぐに店内を歩き、綺麗な金色の三つ編みを揺らしながら商品を確認していく。
「その声はヘスティアか。どうしたんだい？」
奥からミアハと彼の眷属であるナァーザ君が出て来た。彼女はかつて冒険者だったけれど、瀕死の重傷を負い、現在は心的外傷によりダンジョンに潜ることができないため、冒険者を廃業して薬師に専念している。
確か、右腕は本物の腕と変わらず自在に動かせる高度な魔道具で作られた義手だったはずだ。ミアハが莫大な借金をして得た物だね。
「今日はボクの眷属を紹介しにきたんだ。キャロルく……ん……？」
目に見えてキャロル君の機嫌が悪くなっている。もしかして、ボクに腕を抱きしめられたのがそんなに嫌だったのかな!?
いや、確かにキャロル君の胸はアレだけど……
「ヘスティア・ファミリア団長、キャロル・マールス・ディーンハイムだ」
「私はミアハという。こちらは私の眷属であるナァーザだ」
「ナァーザ・エリスイスです。同じく団長をしています」
「そうか。それで、コレはお前の仕業か？　それとも、主神も兼ねてか

？」
　キャロル君が発した言葉にミアハとボクは不思議そうにするが、ナァーザ君はキャロル君を睨み付けた。
「どういうことですか？」
「どうもこうも、この薄いポーションはなんだ。品質が悪い上にこれは水で薄めて甘味でも入れているのか？　そのくせポーションの相場よりも高い。これを主神ぐるみでやっているのなら、詐欺師の店だ」
「なっ!?」
「っ!?」
「どちらにせよ、こんな劣悪品を置くような店をオレが認める事はない。ヘスティア、帰るぞ」
「ちょっ、ちょっと待って！」
　キャロル君が嘘をついていない事は神のボクにはわかるし、子供の言う事を信じるのは親の役目だ。だから、彼女の言葉は間違っていないのだろう。
　キャロル君は錬金術師なんだから、薬などの解析は専門家だと言える。ましてや、世界を解き明かすようなとんでもない子なんだからね。
「待つ理由はない」
「いいから待ってくれ！　ボクがしっかり聞くから！」
「……いいだろう。オレは先に別の用事を済ませてくる。それまでに話をつけておけ」
「う、うん、わかったよ」
　キャロル君が店から出ていき、ボクはミアハに向き直る。
「で、ミアハ。どういうことかな？　キャロル君が嘘を言っていないのは君ならわかるだろう？」
「ああ、そう、だね……ナァーザ、どういうことかな？」
「それは……」
「嘘偽りなく答えなさい」
「……」

ボクは二人の会話を壁に背を預けながら聞いていく。ナァーザ君によると、ナァーザ君がつけている彼女専用の義手とミアハの悪癖に理由があった。ディアンケヒト・ファミリアから借金した額の返済が間に合わなくなりだしているそうだ。

ミアハのポーションを無料で配るのもダメージになっていて、このままでは店も差し押さえられてしまうということだった。

「すまない、ヘスティア」

「ボクは被害がないからいいけど、他の人に売ったりしたの？」

「それは……入れ替えたばかりでしたから……一人だけ買われていきました」

「その人は冒険者かい？」

「いいえ、違います。常連の方でした」

「そうか。ヘスティア、すまないが私は少し出てくる。君は……」

「ボクはキャロル君を待っているよ。それと、借金返済についてはあてがある。まあ、キャロル君次第だけどね」

「……そうか。わかった」

臨時休業としたミアハ達を見送り、ボクはしばらくキャロル君の帰りを待つことにした。

◇

オレ、キャロル・マールス・ディーンハイムは詐欺師の店から出て、冒険者ギルドに向かう。この街の事ならここが一番詳しいはずだ。街の事に詳しくなくても、冒険者については詳しいのは確実だ。

「キャロルちゃん、どうしたの？」

「エイナか。レベルの高い冒険者に人気のある酒場を教えてくれ」

「値段は高いけれど、いいの？」

「ああ、食事をする訳ではないからな。ダンジョンに行かない時に少し働こうと思っているだけだ」
「そうなんだね。じゃあ、幾つか見繕ってあげるね」
「報酬として今度そこでご馳走してやる」
「本当!?」
　何故かエイナの隣に居た別の職員が答えた。
「本当だ。だから、いい店を紹介してくれ。二人でも構わない」
「わかりました」
「それじゃあ……」
　二人から教えてもらった店を実際に回り、確認していく。どの店もいい感じだが、一つだけ面白い店があった。そこは西のメインストリートに面している店で、教えてもらった内容によると従業員は全て女性のようで、オレとしてもありがたい。また、中から強い気配を感じたのも決め手だ。
　店はまだ開店前だが、気にせずに中に入る。するとすぐに従業員が気付いてこちらにやってくる。
「申し訳ございませんが、まだ開店しておりません」
「そうにゃ。だから帰るにゃ」
「生憎と客として来たわけじゃない。店主は居るか？」
「ミア母さんにですか？」
「何の用にゃ？」
「売り込みだな」
「ん～確かにキツイ印象は受けるけれど、可愛いにゃ。よし、こっちにゃ」
「ちょっとアーニャ！」
「大丈夫にゃよ」
　猫の獣人についていき、奥に向かう。
「ミア母さん、お客さんにゃ！」
「アタシに客かい？　う～ん、見ない顔だね」
「売り込みにきたそうにゃ。だから、ウェイトレスになりにきたにゃ」
「違う」

「違うらしいが……」
「そんにゃ!?」
話が進まなさそうなので、オレはダウルダブラを大きくさせて演奏に丁度いい大きさに戻す。
「ほう、変わった魔道具だね」
「オレが来たのは演奏する場所が欲しいからだ」
「嬢ちゃんは吟遊詩人か芸人というわけかい」
「そうとも言える。冒険者でもあるからな」
「そうだねぇ……」
「まずは演奏を聞いて判断してくれ。それで雇うか雇わないかはそちらに任せる。そもそも不定期になるだろうしな」
「冒険者ならそうなるだろうね。いいだろう、演奏してみな。審査は厳しめでいくからね」
「ああ、任せろ」
オレの本気を思い知らせてやる。行くぞ、ダウルダブラ!

◇

演奏が終わると、店主と従業員が固まっていた。オレは気にせず、ダウルダブラをペンダントの大きさにして首にかける。
「どうだった?」
「どうもこうも……」
「最高だったにゃ!」
「ええ、聞き惚れてしまいました」
「こいつなら集客は充分だろう……というか、うちの店が分不相応に感じてしまうね」
「演奏する時は姿を隠してやらせてもらう。勧誘が鬱陶しいだろうからな。それで、いかがだろうか?」
「雇いましょう!」
「そうにゃ!」

「アンタ達……まあ、確かにいいけれど、問題は客が聞き惚れて売り上げが下がるかもしれないことだよ」
「それなら、演奏つきのスペシャルメニューを作ればいい。注文したファミリアを盛大に宣伝してやれば競って買ってくれるだろう」
「なるほど。確かに大手ほど買ってくれるか。このレベルの演奏をさせたとなれば自慢になるだろうし、いいね。雇ってやるよ。アタシはミア・グランド。アンタは？」
「ヘスティア・ファミリアの団長をしているキャロル・マールス・ディーンハイムだ。よろしく頼む」
　豊穣の女主人で月に四回からプラスαで演奏することになった。早速、お昼から頼まれた。外には先程の演奏を聞きつけた連中で溢れていたのも理由の一つだ。ただ、ヘスティアが待っているので、連れてこないといけないのだが……出れそうにない。
「ミアハ・ファミリアの青の薬舗にヘスティアを迎えにいかないといけないのだが……」
「これは無理だろうね。リュー、ちょっと青の薬舗まで行って、この子の主神を迎えに行ってきな」
「かしこまりました」
「キャロルは早速演奏の準備だ。演奏は店の一部に壁を作ってそこでやってもらうか」
「了解した。素材さえあればオレが作る。オレは錬金術師だからな」
「できるのなら、頼むよ。何がいるんだい？」
「木材で充分だ。そうだな、木箱などでいい」
「アーニャ、ちょっと手伝ってやりな」
「はいにゃ！　シルも来るにゃ」
「わかりました」
　三人で木箱を運び込み、それを錬成して壁に作り直す。ついでに扉を増やして、裏からそこに入れるようにする。小さなスペースだが、そこに椅子を置けば後は演奏するだけの簡単な部屋だ。一応、楽譜を置く場所も作ったのでこれで十分だろう。

第4話

オレの知っている曲を幾つか演奏を行った。腕は多少鈍っていたが、すぐに元の腕前まで近づけられた。もっとも、更なる領域を目指すべきだが。

どちらにせよ、腹が減ったので演奏を止めて酒場の方へと移動する。どうせならここで食事を食べさせてもらおうと思ったからだ。

奥の扉を開けて酒場兼食事処へと移動する。するとそこは戦場だった。ウエイトレスは駆け回り、騒がしい感じだ。

その中で知り合いを見つけた。カウンターで大量のパスタを食べているのはヘスティアだ。それはもう旨そうに食べている。

オレは別の席に座ろうと周りを見渡すが、彼女の横以外は空いていない。また、その席には物が置かれていて封鎖されている。不思議そうに他の客は気にしているが、誰も文句は言わない。それを考えると予約席とかそんなものなのだろう。

「あ、キャロルさん。あちらの席へどうぞ。主神様も食事をなさっていますから」

「確か、シルだったか」

「はい」

「シル、忙しいんだから止まるんじゃないよ」

「すいません！　それでは失礼します」

「わかった」

ウエイトレスの一人、シルに言われたので嫌々だが、席に着く。当然、隣の奴はこちらに気付いて……

「ほぐほむむぁ」

「喰ってから喋れ」

「んぐ。お疲れ様。いい演奏だったよ」

「それはどうも」

「キャロル、注文はどうする。アンタはただでいいからね」
「そうか。感謝する。では……適当にお勧めを頼む。栄養を取れればどれでもいい」
「ほう、良い度胸だ」
「キャロル君、それは駄目だよ？」
「オレは基本的に――いや、そうか。そうだな。やはりお勧めを頼む。こちらの料理など知らないからな」
　今のオレの身体にスペアボディは無い。スペアボディがあればこの身体など、いくら壊れようが問題ないが……そういうわけにもいかん。言われた通り、しっかりと食事をとらねばならんな。
「あいよ。腕によりをかけて美味いのを食べさせてやるよ」
　ミアが厨房に入っていったのを見送ると、ヘスティアは皿に入っている自分の分を小皿に別けて渡してきた。
「美味しいよ」
「まあ、もらおう」
　口に入れるとミートソースがほど良い感じで絡んでいるパスタだ。小麦の味もしっかりとでている。
「で、どうだった？」
「ミアハとナァーザ君は謝りにいって、許してもらったそうだよ。それでなんだけど……キャロル君。君なら彼等の問題は解決できるんじゃないかな？」
「できるかできないかで言えばできる。だが、やる理由はない」
　こちらとしてはいくらでも方法がある。錬金術師のオレにとって、世界を構成する物質はなんであれ、必要なエネルギーさえ用意できれば解析し、分解し、再構築できる。
　自らのフォニックゲインを錬成のエネルギーと使えば等価交換が可能だ。逆に言えば変換するエネルギーがなければ何もできないが。
「ミアハはボクの神友なんだ。だから、できたら助けてあげたい」
「オレには関係のないことだな」
「うん、そうだね。だから、キャロル君が欲しい代価を言ってくれ。ボクができる事ならなんでもして支払うよ」

「他人の為にそこまでするのか？」
「他人じゃない。神友の為だ。それにボクの子供であるキャロル君なら、そこまで酷い事はしないだろう？」
「……なんでも、か。それとお前の子供ではない」
「眷属は主神の子供さ」
　さて、どうしてくれようか。なんでもしてくれるのか。それならそうだな。ヘスティアは神様だ。使えるだろう。
「あ、神力を使うのは駄目だからね！」
「じゃあ、その身体で客でも取って稼いできてもらうか」
「嘘だよね⁉　ボク、処女神なんだけど！　というか、思ってもいないよね！」
　ヘスティアの言葉で客が全員こちらに向き、中には買うぞという言葉まであった。そいつは他の女性達に冷たい表情をされている。
「仕方ないな。じゃあ、腕一本だ」
「待って。それ、嘘じゃないよね」
　ヘスティアの腕一つで色々と作れる。聖遺物ではないが、神の腕だ。それはつまり、シェム・ハが復活した物と同じという事。ガリィ達を作る素材としては十分だろうよ。
「いや、それをしたら送還されちゃうからね！」
「致命傷にならなければいいんだろう？」
「片腕って致命傷には……微妙？　まあ、それなら……」
「いや、待て。そこまでやるなら、それはミアハにさせるべきことだろう」
「むしろ、主神に片腕なんて求めるんじゃないよ」
　目の前にドンと置かれる木でできたプレート。そこには様々な料理が少しずつ乗せられている。
「あまり多いと食べられないんだが……」
「後で包んでやるから朝飯にでもしな。そこの主神様から聞いたけれど、ろくな食事が取れなさそうだしねぇ～」
「ふむ。それなら提案がある。オレ達のファミリアは朝と夜の食事を用意してくれないか？　代金は売上からでいいし、夜にもらって朝に

食べればいいしな」
「キャロルがもたらした売り上げから天引きでいいならいいよ」
「ではそれで頼む」
「それってボクもいいのかな？」
「好きにしろ。ただし……待てよ。ヘスティア、働く場所は決まったのか？」
「まだだけど……今、ヘファイストスに探してもらってるところ」
「なら、ここで働いたらいいんじゃないか？」
「神様をここで働かせるのかい？」
「少なくとも賄いがでるだろう」
「ほほぅ」
　真剣に考えだす二人。ミアはヘスティアを上から下まで見て……頷く。
「いいだろう。こちらとしても人手が足りないからね。神様が居るのなら変な事をする連中は減るだろうし、こちらとしても助かるよ」
「ボクも仕事ができて助かる。うん、そうしよう」
「じゃあ、決まりだね。で、腕とかというのは流石になしにしてやりな。働く効率が悪くなるしね」
「確かに勘弁してほしいね」
「腕が駄目なら髪の毛の一部とかでもいい。爪でもいいが、女なら髪の毛の方がいいだろう。それとヘファイストスか。彼女の髪の毛でももらってきてくれるとありがたい。追加でファルナを物に刻んでくれるのなら、あの店を助けてやる」
「わかった。聞いてくるよ！」
　ぱっと席から飛び降りて駆けだしていくヘスティアを見送る。
「アンタも大概だけど、あの主神様も結構おかしいね」
「身内にはとことん甘いのだろう」
「騙されないように注意しとくんだよ」
「オレがしっかりと手綱を握っておく。それに騙した奴は騙される覚悟があるという事だ。オレに被害がでるのなら、錬金術師を相手に喧嘩を売ったこと、しっかりと後悔させてやる」

「凄い顔だけど、殺しとかは止めてくれよ。アタシの店で雇っているんだからね」
「安心しろ。殺すにしても色々とあるだろう。社会的にとか、金銭的に、とかな」
「……見た限り、アンタの錬金術はかなりやばいレベルのようだし、あんまりやばいことはするんじゃないよ」
「手加減をするかどうかは相手次第だな。ああ、それと金を払うから情報を教えてくれ。欲しいのはディアンケヒト・ファミリアだ」
とりあえず、助ける準備はしておいてやろう。助けるといっても、無料でするつもりはないが。

◇

食事をしてから豊穣の女主人を出て本屋に向かう。この世界では本は高級品のようで、中には億単位のもあるそうだ。もっとも、そちらは魔導書らしいが、解析してみたい。だが、現状では必要ないので、後回しにする。
複数の白紙の本とペン、インクを購入し、鉱石を購入する。それから豊穣の女主人に戻る。今日は夜の演奏も頼まれたので、あそこで時間を潰させてもらう予定だ。
豊穣の女主人でカウンターに座りながら白紙のページを一枚切り取り、そこに術式を書いてペンとインク、魔石を置く。インクにオレの血を垂らして混ぜ、それから構築した術式を発動。
分解と再構築を得てあちらの世界でオレが使っていた魔導具のペンを生み出す。こいつはオレが前に使っていたインクの無くならないペンだ。インクはフォニックゲイン、こちらでは魔力で生み出される。空中に文字を書くことも可能だ。また思考をそのまま文字にして自動で書き写すこともできる。
そいつを使いながら、この世界に来て解析した大気や鉱石の成分。

魔石の構造や力などを書き込んでいく。一応、誰に見られても大丈夫なように暗号化し、かつオレの世界で使われていた複数の言語を使用して書く。傍から見たら料理のレシピにしか見えないだろう。

オレの脳内に入っている記憶を書き出す必要もあるだろうが、それはまだいい。こちらで全てがそのまま使えるわけではない。確かにスキルによってオレはあちらの時代と同じ事ができるが、普通に錬金術を使うよりこちらの法則に乗っ取って使った方が消費も少ないし威力も高くなる。

一冊はこの内容で書き連ねながら、もう片方の手でガリィ、レイア、ミカの設計図を記憶から転写していく。必要な術式と素材も書き出してチェック項目を作成する。

彼女達に使われている術式を修正し、より強力になるようにシェム・ハとの戦いで得た真理も適応させる。七つの音階による神の力の無効化または突破。それを行えるようにしないといけないのだから、改造は必須だ。だが、幸いにも素材はその辺に転がっている。

特に重要なのはガリィだ。

彼女は聖杯の力を与えて錬金術の行使に必要な想い出を扱う能力に長けさせた。　他のオートスコアラーと同様に対象の粘液から強制的に想い出を搾取する機能に加え、蓄えた想い出を分配するという独自の機能も与えた。想い出を搾取する機能を持たないミカに想い出を与える役割も担うためだ。

戦闘に於いては水を扱う事に長けており、特に空気中の水分を鏡に見立てて幻像を投影する撹乱戦法を得意する。また、足元の地面を氷結させてスケートのように高速移動したり、剣状の氷柱を瞬時に作り出して剣戟に用いるなど、高い汎用性を持ち合わせているが、もっと強化しないといけない。

水に関する素材を集める必要もある。それに思い出を集めるには人から奪うのが一番効率がいいが、それをやればエルフナインやあいつらは五月蠅いだろう。代わりになるものもあるのだし、そちらで代用しよう。

「ずいぶんと凄いことをやってるにゃ」

「アーニャか。どうした？」
「これ、ミア母さんからの差し入れにゃ」
「ああ、いただこう」
　ガリィ達の設計図を書き終えた本を仕舞いながら、ふと受け取ったコップに口をつけつつ見ると、不思議そうにしているアーニャがいる。
「なんにゃ？」
「いや……」
「ふにゃぁっ!?」
　アーニャの耳を掴み、ふにふにしてやる。どうやら本物みたいだ。毛を一本貰い、分析してみる。
「い、痛いにゃ。な、なにするにゃ！」
「少しもらうぞ。ふむ。構成はこんな感じか」
「ひっ」
　アーニャの手足を錬金術で拘束し、解析用の術式を発動する。身体構造と猫耳、尻尾など全てを解析する。
「何をしているのですか！」
「解析だ。すぐ終わる。よし、終わりだ」
　エルフのリューが怒鳴り込んできたので指を鳴らして解放してやると、涙目でこちらを見詰めてくる。代わりに鉱石を錬成したアクセサリーをやる。細胞を再生させる力を強くするものだ。肌の再生を施すので美肌になる。
「これをやるから許せ」
「なんにゃ？」
「少量の魔力を消費することで常に綺麗な肌を維持できる。いらないのなら構わ……」
　差し出したアクセサリーが消えて、いつの間にか隣に居たシルが持ってつけていた。
「ちょっ!?」
「こ、これすごいです！　本当に肌が綺麗に若返っていきますよ！」
「人体構造などほぼ変わらんから効果はでるだろう。効果は」

「シル！　返すにゃ！　それは私の物にゃ！」
　二人が争いだすと、リューが止めようとする。だが、オレはそれを手を上げて止める。
「まあ、見ていろ。因果応報になる」
「え？」
　少しすると、シルは蹲って頭に手を当てだした。リューがこちらを訝しんでいるが、次第に気付いたようだ。
「なんですかこれ！」
「猫の獣人用に調整した奴だぞ。用法用量は守れ、ということだ」
「にゃはははは！　シルに猫耳と尻尾が生えてるにゃ！」
「本来ある場所がないんだ。それだったら作るよな」
　しかし、ない部分を生み出すのでは消費する魔力量がかなりするはずだが、シルは軽く出せたようだな。
「こ、これは戻るんですか！」
「人型のを用意すればな」
「用意してください！」
「そうだな……３３０万ヴァリスでいいぞ」
「高っ！」
「アーニャにやったのは身体を調べさせてもらった礼もかねてだ。だが、ヒューマンのお前を調べたところでオレになんの得も無い。何か知的好奇心を満たすようなものを用意するのなら別だがな」
「……りゅ、リュー……」
「自業自得です」
「なんの騒ぎだ……い……ぷっ」
　ミアも来て盛大にシルを見て笑いだす。皆で笑っていると、彼女はむくれだしていく。それから事情を説明する。
「人間の構造を弄れるのかい」
「人体錬成など、錬金術師なら誰もが考えることだからな」
「まあ、それはいいけど……もどせるんだよね？」
「金かそれ相応の代価をもらえばな。そもそもアーニャにやろうとしたのを横取りしたのが悪い」

「うっ、反論できません」
「アンタが言えたことじゃないでしょう。同意を得てからやりなさいよ」
「耳をみていると押さえられなくなった。反省も後悔もしていない」
ミアの拳が落ちてくるが、金色の◇を整列させた障壁で防ぐ。ミアは手を痛そうに撫でてから、呆れた表情をしだした。
「錬金術師ってのはどいつもおかしいのしかいないのかい」
「錬金術師とは真理を探究し、この世界を解き明かす者達だ。故に行動は知的好奇心によるものが多い。なんの問題もない」
「やれやれ……アーニャはそれでいいのかい？」
「別に問題ないにゃ！　若々しい肌を維持するのは全ての女が望む事にゃ！」
「まあ、オークションに賭けたら億単位はいくかもしれないね」
「それはやった奴だ。好きにしろ」
「りゅ、りゅー」
「うっ……これは……助けるべきなのでしょうか？」
「よし、シルはそのまま店に出な。一週間後に治してやってくれ。代金は店から出すよ。解除だけならできるだろう？」
「可能だ」
「なら、使い回して猫耳で接客してみるか」
ミアの一言により一週間の突発イベントが行われた。店員が全員、猫耳と尻尾を生えさせて接客する恥ずかしそうな姿は冒険者達を狂気に彩らせ、盛大に金を落としてくれたそうだ。
特にロキ・ファミリアの主神を始めとした神々がよく現れたそうで、オレもほぼ常に演奏してやったし、オレも少し酔っ払い共の片付けを手伝ってやった。その時に髪の毛の数本がなくなっていてもなんの問題もない。

◇

一週間。狂喜乱舞した宴は終わり、オレはヘスティアに連れられて青の薬舗へとやってきた。
「これでどうか助けてくれ」
頭を下げて差し出してきたのは袋に入った髪の毛が三つ。どれも解析してみると神の物だ。
「二人で土下座してヘファイストスにお願いしてきたんだ」
「うむ。これでどうか頼む」
「わかった。オレが借金を肩代わりしてやる。だから、お前達はオレにしっかりと返済しろ。そちらが真面目に商売をしている限りはこちらは利息なしで無期限に待ってやる。ただ、オレの商品も置いてもらうし、神ミアハには髪の毛を多少提供してもらうが、その程度だ」
「それはもちろんだ。その程度なら問題ない」
「それとその義手だったか。見せてみろ。オレはそういうのには詳しい。物によっては本物の腕を用意してやる」
「できるのかい！」
「可能だ。それ相応の……この場合だとその銀の腕になるかはわからないがな」
神であるディアンケヒトとナアサが作った義手だぞ。それはつまり、アガートラームの原形またはそれその物ではないか。構造を解析、ミカに取り付けてやるのもいい。なんならオレの武器として装備してもいいだろう。いっそのこと、シンフォギアでも再現してみるか？　いや、詠うのは嫌だからなしだな。
「わかった。とりあえず、準備をしてくるから待っていろ」
「ボクはついていくよ！」
「いや、来るな。邪魔だ。必要な時に呼ぶから、それまではここで店を徹底的に綺麗にしておいてくれ。それとミアと店員の話を正式にしてきた方がいい。あれから会ってないだろ」
「あ、そうだったね。わかったよ」
「ナァーザだったか、少し手伝ってくれ」

「わかりました」
　さて、ナァーザを連れて街へと出る。行く場所は馬車を借りられる所だ。そこで二台借りる。
「しばらく待っていてくれ。今から二時間後に向かえにくればいい。こなければ助ける事はなしだ」
「わかりました」
　さて、オラリオの外に手続きをして徒歩で出る。冒険者が外に出るには手続きが必要らしい。それをしてから荒野を歩く。しばらく移動して誰も居なくなった事を確認し、手頃な岩を鋼糸魔弦を使いながら集める。集めたら術式を発動し、必要ない思い出を焼却して金塊を錬成する。
　調べた限り、ここの錬金術師は金塊の錬成はまだできない。そのレベルまで達していない。むしろ、鉱石に関する知識が乏しい。精々が抽出する程度だ。つまり、法律上でも違法でもなんでもない。
　まあ、知られたら規制されるだろうが、今は大丈夫だ。つまり現状で大量生産して亜空間に仕舞っておけば、バレたとしても作った日付的に罪には問われない。神は嘘を見抜くのだから、堂々と宣言してやればいいのだ。
「売れそうなのは金銀に宝石か。ダイヤモンドは道具としても使えるな。とりあえず一種類１０ｔほど錬成するか」
　焼却する記憶は結社の連中の物だ。奴等はすでに敗北した。その技術だけ残しておけば後はいらん。

◇

　さて、大量の錬成を行い、ほぼフォニックゲインが無くなってしまったが、亜空間には金銀財宝が補充された。オラリオの総資産には届かんだろうが、確実に値崩れを起こす程度には作れた。
「来たか」
「おまたせ、しました……あの、これは……」
「見ての通り金塊だ。オレの隠し財産という奴だ。馬車に積み込め」

「わ、わかりました。ですが、これだけの量、馬車には積み込めませんよ」
「仕方ない。それなら積めるだけでいい。後は人と馬車を追加する」
「わ、わかりました」
　御者にも手伝わせて場所を動かせる限界までいっぱいにする。御者は盗もうとしたら殺すとも伝えてあるし、後でチップを十分に支払ってやると言えば大喜びだ。俗物だが、扱いやすい。
　もっとも、量が多いので追加で呼んだ連中にも手伝わせた。中には冒険者もいるが、この程度は雑魚だ。オレの障壁を突破すらできないだろう。
「おい、この金塊があれば……」
「相手は小娘だ……」
　そうだ。それでいい。徒党を組んでダンジョンで襲ってこい。思い出の補充は急務ではないが、必要だ。問題は粘膜摂取か。アーニャの尻尾をもした物でも作るか。舌を再現させて口の中に入れさせる。うむ。それでいこう。
「あの、積荷は……」
「全て金塊だ。税金はいくらになる？」
「しょ、少々お待ちください……」
「面倒だ。数を数えて金塊一つで手を打て。まさかそれ以上な事はないだろう」
「も、もちろんです、はい」
「余った分は好きにしろ」
「ありがとうございます！　どうぞお通りください！」
　金塊一つをくれてやり、街へと入る。連中にとってはとてもありがたいことだし、手早く終わらせてもらった。
　その後、ミアハ・ファミリアによってから、ディアンケヒト・ファミリアの前へと移動する。
「ねえ、君、まさかこの金塊……」
「問題ない。法律を調べたが、規制はされていない」
「……そりゃ、こんな事をできるなんて誰も思わないさ。で、このお

金ってファミリアには……」
「一切入れん。全てオレの個人資産だ。教会の修繕などは行うがな」
「だよね～うん、家がましになるならいいか」
「それとだ。ホームを俺に売れ」
「へ？」
「ヘスティアは騙されやすいし、今回のような事があって連帯保証人にでもなられてホームを追い出されるのは困る。だから、オレ個人の資産として貸し出すことにすれば知らぬ存ぜぬで、そのまま使える。また、それなら俺が好き勝手に改造しても文句は言われない」
「……確かにそれだといいかも。でもね……キャロル君に頼りっきりなのは嫌なんだよ」
「まあ、考えておけ」
「うん」
　どうせ亜空間にオレの工房は設置するんだ。だったら、教会が無くても問題はない。不動産屋で別の拠点を購入し、そこにも扉を繋げればいいだけだしな。

　さて、ナァーザを見張りに残し、ディアンケヒト・ファミリアに入る。もちろん、誰も馬車に近付けないようにするため、ナァーザに馬車の上から見張ってもらい、周りを鋼糸魔弦で封鎖する。不用意に馬車の中に手を入れたら斬り落とされることになるので、注意だけしておく。
「失礼。ディアンケヒトはいるかな？」
「ミアハ様、返済ですか？」
「あ～うん、似たような事かな。とりあえず、取りついでこっちに来てくれるように言ってくれないかい？　見てもらった方が早いしね」
「かしこまりました。少々お待ちください」
　しばらくすると、奥から男がやってきた。そいつはいやらしい笑みを浮かべながら、ミアハをみる。そして、隣にいるオレとヘスティアをみると不思議そうにする。
「お前がディアンケヒトか」

「無礼な！」
「まあ、まあ、子供のすることだ。私がディアンケヒトで間違いない」
「そうか。なら、ミアハ・ファミリアの債権を買いにきた」
「子供が出せる額ではないのだがね？」
「いくらだ？」
「それはだね……」
　言われた借金の額にミアハが文句を言う。
「待て！　金額がかなり上がっているぞ！」
「利息だよ」
「契約書を見せてくれ」
「本当に買うつもりかい？」
「ああ、そうだ」
「わかった。おい」
　見せられた書類を確認し、利息の部分もしっかりとみる。法律で決められた上限ぎりぎりだな。
「確かにあっている」
「本当かい！」
「まあ、問題ない。では、買い取ろう」
「本当に？　いや、嘘ではないのだが、そんな額をヘスティアが用意できるはずがない……」
「ボクは用意していないからね」
「オレの個人資産だ」
　書類を返してから外に出ると、騒ぎが起こっていた。一部の冒険者が馬車に入ろうとして、ナァーザに打ちぬかれ、その間に背後から入ろうとした奴は腕を失ったようだ。
「さて、この馬車の中には金塊を積み込んである。確認してくれ」
「アレは無視かい？」
「強盗がどうなろうと知ったことではない。オレはしっかりと警告をしておいた。こちらが指示する部分から運び出さないとこうなるから気を付けろ」
　一部の鋼糸魔弦を解除し、金塊を置いていく。

「現在、金の相場は……」
相場を告げてから金塊を置いておき、追加で一つ置く。まだまだあるが、ここらは相手次第だ。
「ふむ」
「ああ、これが本物かどうかはしっかりと確認していい。手間賃として金塊を一つだ。拒否するのなら、こちらで換金して正式な手続きとして返済するまでだ。金額は他の神々の前で確認したし、これ以上の増加は認めない」
「……いいだろう。確かに売り渡そう。だが、迷惑料については……」
「しらん。そいつらから貰え。何故強盗の分までオレが払わなければならん。もしそうなら、お前達の時も同じになるぞ」
「わかった。彼等から徴収しよう。それにしても、何処かの王族か富豪のお嬢さんか？」
富豪ではあるかもしれんな。

契約を行い、必要分の金塊を支払った。これでミアハ・ファミリアの債権は手に入れた。続いて木材屋や石材屋などを回って半分の資材を購入して亜空間に収める。店の連中はあんぐりとしていたが、気にする必要はない。
続いてミアハ・ファミリアの近くにある店舗を買収に入る。店主たちにはそのまま雇う事を条件に売ってもらった。売り上げも丸々懐に収めていいと伝えてある。ただし、建物の改造や区画整理などをさせてもらう。
何をするかと言えば簡単だ。商店街ではなく、ショッピングモールを作る。どうせこの金塊を狙って馬鹿共が来るんだ。それだったら盛大に使ってやる。後々利益を吸い上げるシステムにしてな。オレの利益？　思い出だ。大量に収集するのには粘膜摂取が必要だが、微かに複数の者達から少しずつもらうのならどうだろうか？　ショッピングモールで楽しく過ごし、帰る。別の店での買い物の思い出を少し頂く。そうすればまたこちらにやってくるだろう？
これは欧州の錬金術師がよくやっていた収集システムだ。中には

街ごとやっていた奴もいる。
　まあ、反対する奴もいるので立ち退きを頼むか、こちらの計画を図面などを見せながら懇切丁寧に教えていく。個人資産による大規模開発。ギルドの許可は？
　買い取ってリフォームするだけだ。商店はそのままで内装などが変わるだけ。ギルドは一切関与させない。法律上で問題ない範囲で行うのだしな。まあ、仕事はガネーシャ・ファミリアというところに通すのもいいし、なんならオレ一人でやってもいい。
「ねえ、キャロル君。いいのかな？」
「問題ない。オレ個人の収入源を作るだけだ」
　盛大に仕事を発注し、店主達には商品の開発やオレの知識にあるレシピを教えて作ってもらう。さて、面白くなってきたな。
　低レベル冒険者もギルドを通さない雇用形態で日払いにするし、やはりガネーシャには通した方がいいか。

「俺がガネーシャだ！」
「そうか。オレはキャロル・マールス・ディーンハイム。ヘスティア・ファミリアの団長だ。個人的に群衆とオレの為に雇いたい」
　計画を詳しく話し、オレが莫大な資金を投じるものと、その証拠として残りの金塊を全てガネーシャ・ファミリアに預ける。
「ふむ。オラリオの開発。確かにこれだけの金塊が有れば可能だろう。しかし、君に利益はないのではないかな！」
「あるさ。オレ直営の店舗も構えるし、オレが作った品物も置いてもらう。それにオークション会場も設置するつもりだしな。その辺りからは金を取る。それに仕事中はポーションを大量に配布する。怪我をしたり、病気をしたりしている奴も治療して働いてもらう」
「了解した。群衆の為になるのならよかろう！」
「ではよろしく頼む。それと女神連中に伝えてくれ。ギルドの介入を許さずに作らせてくれるのなら、美容にいいアイテムを販売する。内容はこのようなものだ」

アーニャに渡したアクセサリーを始め、美容関連の物を沢山用意した。これはすでにヘスティアに街中でわざと話しまくるように伝えてある。女神達が必要なくても、その眷属は違う。眷属から突き上げを受ければ動かざるをおえない。また、こちらに降りてきている神は食べたりするのだから、たまるものはある。

治安の維持が問題だが、そこはオレが全てを担う。監視カメラを設置し、警備ゴーレムを配置すればいい。また、ここで何か有れば美容関係の商品を止めると言えば女神やオラリオの女性達は動く。オラリオの三分の一はいる女性を相手に勝てるかな？

少しすればギルドに呼び出されたが、自分から来いと追い返した。やってきた副ギルド長と名乗る男に色々と言われたが、利益を寄越せと脅して来たので、録音して公開してやった。

それから民衆を扇動し、ガネーシャ・ファミリアを旗頭にしてギルドに抗議を入れさせる。当然、その間にかかる損失はすべてオレが持ってやるといえば民衆達もこぞって詰め寄る。

ギルドの業務に問題がでればギルドの神はどう動くかなどわかりきっている。処分をしなければ叩かれるだけだ。当然、他の冒険者からも突き上げがある。さて、ここで問題になるのは開発に出している金が個人資産であり、オレの利益が外から見る分にはほぼないということである。

民衆にはどううつるか？　ミアハ・ファミリアのことも合わせれば美談にしかならない。零細ファミリアを救い、私財を投じて利益がほぼでないのに街を再開発して雇用を生み出す。

脅しをかけてきたギルドとオレ、どちらを味方するかなど明白だ。そもそも決められた範囲で買い取って行っている上に追加で金、賄賂の要求など受ける必要はない。

「ねえ、やりすぎな気がするんだけど、これ狙われたりしないかい？」

「するな」

「ちょっ！」

「ほら、来たぞ」

裏路地を歩けばすぐに暗殺者が襲ってくる。そいつらの手足を鋼糸魔弦で拘束し、口に尻尾を入れて思い出を採取する。その情報を公開し、所属ファミリアなどに追及する。
冒険者の思い出というのはファルナを受けている影響でとてもエネルギーになる。ガリィ達を蘇えらせるためだ。どんどん襲って来い。その分だけ連中の資産を奪わせてもらおう。

ちっ、予想外に早く事態が収まった。脅してきた奴はオラリオ追放で、ファミリアからは資産をある程度奪えたが、途中で諦めやがった。流石に都市では動かないようだ。
まあ、ある程度の資金回収という名のマネーロンダリングは終えた。もともとただの土だ。オレにとっては十分な収入だな。この金を使って次は冒険者を率いれるか。保険や孤児院の経営などもいいな。虐待されている子供を引き取って、記憶を奪って手駒として育てる。各ファミリアなどに送り込んで情報の収集……利益はかなりでそうだ。
これ以上何かをする時は言えと五月蠅かったので、ヘスティアに教会だから孤児院を作っていいかと言うと、大喜びして泣きついてきた。
「もちろんだよ！　ぜひお願いするよ！」
「ああ、任せろ。だから、どんどん拾ってこい」
「わかった！」
ヘスティアが出て行ったので、まずは教会を手に入れた思い出を焼却して、購入しておいた周りの建物と一緒に錬成する。大聖堂と呼べるべき建物を錬成し、骨組みと足場を作り、シートで覆って作成段階だと誤認させる。実際は完成しているし、５００人くらいは生活できるようにしてあるし、地下も問題ない状態にした。
防衛システムも完備させ、アルカノイズとはいかないまでも警備用のゴーレムを配置する。手慰みで作った奴で性能はよくないが、獣型なので番犬とすればいい。後は鳥型も作って監視を行っておく。それと装備は銃火器だ。

第5話

さて、ホームの改造は終了した。表は普通の大聖堂だ。その地下には亜空間を生成し、チフォージュ・シャトーと同じ機能はないが、外見が同じ物を用意した。

世界を分解する事はできない外側だけの存在だが、こちらの方が作業をしやすいからな。

ショッピングモールと大聖堂の建設に合わせて発注した資材にシャトーの分も混じり込ませたわけだが、必要な資材と金は全く足りん。まあ、おいおい完成させればいい。今は工房としての広さと機能があればいいだけだ。

コツコツと足音を響かせながら、俺以外が発する一切の音がしない廊下を歩き、細部まで確認する。前はここにクローン達やあいつらも居たのだが、今は他に生物などは居ない。

「無駄に広いな」

歩きながらシャトーの最深部に到着した。ここには大きな炉心を作り上げた。材料は黄金錬成により作りあげた賢者の石。ファウストローブにも使われる材料だが、炉心がなければミカ達は作るのに時間がかかり過ぎる。

「問題ない。そして、最後の材料はこいつだ」

懐から取り出したのはヘスティアの髪の毛など身体の一部。あいつが生活している上で抜けた奴や、唾液なども回収しておいた。また、寝ている間に血を少し抜かせてもらった。

奴はギリシア神話に登場する炉の女神だ。クロノスとレアの娘で、ゼウス、ポセイドン、ハデス、ヘラ、デメテルと兄妹。

古代ギリシアにおいて炉は、家の中心であり、従ってヘスティアは、家庭生活の守護神として崇められた。

また炉は、犠牲を捧げる場所でもあり祭壇、祭祀の神でもある。さらに国は、家庭の延長上にあるとされていたため国家統合の守護神と

され、各ポリスのヘスティアを崇める神殿の炉は、国家の重要な会議の場であった。加えて全ての孤児達の保護者であるとされる。
　大聖堂を孤児院として運用し、そこで使われるエネルギーを全て賄うこの炉心にヘスティアの素材を使うのは当然だろう。その名の通り、加護を与えてもらう。ファルナまで刻ませれば生きた炉心の完成だ。
「よし、後はヘスティアに刻ませるだけだな」
「呼んだかい？」
「何故ここに居る」
「いや、聞き忘れた事があって戻ってきたらいきなり教会が大きくなってるじゃないか。だから、キャロル君を探してここまで来たんだよ」
「良く道がわかったな」
「愛のなせる技だね！」
　親指を立てて腕を突き出してくるヘスティア。
「ちっ」
「舌打ち⁉」
「まあいい。来たのなら丁度いい。こいつにファルナを刻め」
「なんで？」
「こいつは見ての通り、炉心だ。完成させるにはファルナが必要だ。孤児を養いたいなら言う通りにしろ。すくなくともこいつのお蔭で寒さに震える必要はなくなるぞ」
「……嘘じゃないね。子供達の、キャロル君にとってこれは大事な物かい？」
「ああ、そうだ。オレの仲間達を呼び寄せるためにも必要な物だ」
「わかった。なら、やろうか。それが子供達の為になるのなら、ボクにとっては幸いだ。ただ、大きいから時間はかかるよ」
「眠らずにやれ」
「そんなっ⁉」
「やれ」
「じゃあ、ご褒美を頂戴！」

「……いいだろう。何が望みだ」
「これから一緒に寝よう！」
「……
いいだろう」
「よし！　じゃあ、やっちゃおう！」
ヘスティアは張り切って炉心にファルナを刻んでいく。俺はそれを解析しながらゆっくりと待つ。オレに刻まれたファルナと新たに刻まれていくファルナ。両方を解析し、文字を理解し、疑似的なファルナを生み出せるように研究するつもりだ。神の力を理解せねば、神を殺す兵器など作れんからな。

◇

無事に炉心が完成し、起動した。馬鹿みたいに膨大な熱量を持つそれは暴走すればオラリオなど容易く吹き飛ぶだろう。
「きゃ、キャロル君！」
「問題ない。ヘスティア、大サービスだ。オレの歌を聞かせてやる」
「え？」
ダウルダブラを取り出し、ファウストローブを身に纏って歌う。鋼糸魔弦と錬金術を使いながらエネルギーを暴走させずに施設と大聖堂に流し込む。強弱も全て制御し、術式を完成させる。
レイラインとして構築したエネルギーバイパスの中を通り、隅々まで淀みなく行き渡り、使われなかったエネルギーは炉心に戻ってくる。
それが経験値へと変換されて炉心のステータスが自動更新されていく。概ね問題なく制御はできた。
「お、明るくなったね」
「炉心が目覚めたからな」
生成されるエネルギーは想定以上に高いが、問題はない。続いて生産ラインと警備システムにエネルギーを送って起動させる。
生産ラインは膨大なエネルギーを圧縮させて結晶化させていく。

思い出の焼却よりは効率が悪いが、聖遺物の作成には膨大な力がいるからこちらでも賄う。
　続いて警備システムは基本的にゴーレムだ。こいつらが起動して教会の警備を行う。過剰なエネルギーがあるので、掃除用の物も用意しておくか。
「ねえ、キャロル君。ひょっとしなくてもこれってやばくないかい？」
「問題ない。襲われたら排除するだけだ。それより忘れ物ってなんだったんだ？」
「行ってきますって言ってなかっただろ？」
「はぁ……」
「溜息っ!?」
「さっさと行ってこい」
「行ってきま～す」
　ヘスティアを入口まで送りつけた後、オレは改めて工房で道具を作る。正直、ダンジョンでの移動が面倒だ。だから、バイクを作る。三輪のトライクを作ればいいだろう。装備はブレードと機関銃だな。いっそミサイルも装備するのもいいか。
　操作は自動で行うようにしておけばいい。警備システムもほぼ自動化されているから容易い。
　トライクは色々と魔改造するが、しない奴も売れるかもしれないな。この世界は移動手段が乏しい。基本的に馬か歩きのようだしな。ダンジョンの狭さも考えると……収納可能なアイテムと一緒に販売すればトライクやバイクは売れるだろう。一機一億ヴァリスで販売してみるか。収納機能つきにして容量を拡大した物は１０億ヴァリスにすればいけるか？
　襲われてどうしようもない時に逃げる手段にもなるが……それなら転移結晶を売った方がはやいが、流石に不味いか。よし、ショッピングモールのオープンイベントにオークションとして出そう。それとこの街は娯楽が少ないようだし、バイクレースでも作ってみるか。
　バイクの供給はオレがして、神共にオーナーをやらせ、運転手は冒険者だ。ショッピングモールを囲むようにコースを生成し、走ってい

る映像を全てモニターに映してやれば一部以外は地下でいい。
地下の開発に関しては……駄目か。下水があるだろう。よし、それならオラリオの外の土地だな。権利関係はどうなっているかわからないが、ヘスティアに神会を開かせればいい。
企画書を渡してそこでプレゼンと遊ばせてやれば暇を持て余した神々は喰いついてくるだろうが……駄目だな。流石にそこまでやれば狙われるか。狙われても問題ない理由を用意すればいけるか。
神々にも出資させて企画と運営の権利をくれてやる。ただし、バイクは俺の場所で買い、かつショッピングモールの利用を絡めること。トトカルチョは全てショッピングモールで行うようにすれば……連中は喰いついてくるだろう。やはり、コースを作って子供の遊び場にしておくか。
よし、決めた。一先ずはショッピングモールにバイクのシミュレータを配置し、そこで遊ばせる程度にしておこう。エルフナインの知識にあるゲームセンターだったか、それを作ればいい。あの程度のシステムは容易く構築できるしな。なにより金がかからん。

実際に何台かのバイクを作り、シミュレータシステムを搭載。続いてコースを作成。しかし、画面が面白くない。アバターを作成して亜空間で実際に走行させてやろう。ヘルメットに亜空間を知覚できるようにすれば可能だ。
待てよ。これなら弓を持たせたシューティングゲームでも作るか。それともいっその事、訓練用としてダンジョンを忠実に再現したシミュレータを作成するか。どちらにせよ、匿名でショッピングモールに配置する。まずはバイクからだな。

◇

バイクのゲーム機を数台作成し、それを亜空間に収納してから大聖堂に移動すると、ヘスティアが戻ってきた。七人の少年少女と若い女

性を連れてだ。
「連れてきたよ！」
「オレは関与しないから好きにしろ。生活費ぐらいは出してやるがな」
「わかってるよ。ついでに人も雇ってきたからね」
「雇う金まで出すとは言ってないが……」
「あ、あの、申し訳ございません！　わ、私はなんでもしますので、子供達の事をお願いします！　わ、私はか、身体を売れば……」
「お姉ちゃん……」
　餓鬼共が女性に抱き着いているが、オレの知ったことではない。
「キャロル君。この子達はギルドの支援を受けて孤児院を運営していたそうだ。でも、支援が打ち切られ、建物も取り上げられたそうなんだ。行く当てもなくて、裏路地で相談してたところをボクが拾ってきた。駄目かな？」
「雇うつもりはない。だが、教会の掃除やヘスティアの維持管理をするのなら、置いてやる」
「待って。ボクは施設と同じ扱いなの！」
「しっかりと働くならヘスティアの裁量で好きにして構わないと言っただろう。まあ、教会の景観を損なわないために食事と服ぐらいは用意してやる」
「ありがとうキャロル君！」
「「ありがとうございます」」
「じゃあ、ボクはもっと拾ってくるね！」
　ヘスティアの奴はさっさと出て行った。アイツ、どれぐらい養うつもりなんだ？　実際問題、施設の維持に人が大量に居るのだが……
「……あ、あのぉ……」
「わかったか？　アイツの管理を頼むぞ」
「は、はい！」
「ああ、それとやはり働いてもらっていいか？」
「な、何をすれば？」
「なに、カウンセリングだ」

「や、やったことはありませんが……」
「機材は用意する。お前は俺の言う通りにやればいい」
教会に懺悔はつきものだろう。消す、消さないは彼女に選ばせて忘れたい嫌な思い出を収集させてもらう。
ついでに治療院も行って稼がせてもらうか。使う薬はミアハ・ファミリアとオレから提供すればいい。

◇

数月後。無事にショッピングモールが完成した。オレはオーナーとして挨拶を行った。といっても、プレオープンで、招待客は神々と護衛としてそのファミリアの団長と副団長のみだ。
オレの仕事は基本的に施設の維持管理と詐欺などの犯罪や問題行動を起こした店主達を取り締まり、そいつらを追い出す役割だ。
またショッピングモールの東西南北にはエルフナインの名前でテナント契約をし、球体型のバイク・シミュレータを配置した。基本的にに三階建ての大きな建物になっているので、テナントとして貸し出す場所は多い。前から入っていた店以外はほぼ全てがオレの管轄になっているようなものだしな。
また、巨大な水槽を設置して亜空間の映像を映し出したり、バイクレースの映像を映し出すスクリーンが設置された柱もいくつか用意してある。一部は広告を載せて流したりもする。
問題は警備だが、武器の持ち込みは一切認めない。また騒ぎを起こしたらそのファミリアに損害賠償を請求することを伝えて、了承した冒険者のみ入場を許可する。神々に関しては武器を持っていない限りはフリーパスだ。
オレが作った魔導具店は基本的に美容関連商品で、武器関係は一切

作っていない。他の商品はバックの内部空間を弄って重量軽減効果を2倍から10倍にした商品で、値段はとても高く、普通のバックの10倍から100倍の値段で販売する。
　次の商品は上級冒険者にとって必需品であろうテント。内部空間は拡張され、10人が余裕で過ごせる広さがあり、ベッドが四つと個室でシャワーとトイレを完備。汚物は全て分解されるので臭いもなしな上に灯りもつく。更に警報装置もあるのでモンスターや人が近付いてきたらわかる。しかも、中に道具を置いておけばそいつらも纏めて掌サイズの結晶体に収納可能。お値段はたったの1億ヴァリス。
　売れるかは知らん。オレがダンジョンで使う時の為に作った。一人でゆったりと長時間を過ごすならこれぐらいはいる。
　店員はゴーレムの自動対応でさせている。このゴーレム達は全部エルフナイン製としておいたので、関係者はオレが購入して持っていた物だと思っている。オレの収納容量が凄まじいことは知っているからな。まあ、そのせいで税金の追加徴収を受けたが、正式な理由があれば支払ってやる。
　それと飲食店もあるが、酒類の取り扱いは一切ない。アレは別の所で買うように仕向けた。そうでないとミアに申し訳ないし、泥酔者が暴れると面倒だからだ。どちらかというと、ショッピングモールは冒険者や一般人が休日などに遊びにくる感じで、おしゃれな感じにしてある。
「さて、諸君。ゲームの時間だ。投票は終えたか？」
「1番に600ヴァリスや！」
「3番に700ヴァリス！」
「9番に5000ヴァリス」
　操縦者となった団長や副団長達が球体に入り、バイクレースを開始する。その映像が大スクリーンに映し出され、一部には有料でゴーグルを貸し出して運転手と同じリアルな映像がみえるようにしてやった。亜空間とはいえ、地球の歴史を参考にして作り上げた様々なコースだ。とても面白いだろうよ。
「投票は終わりだ。レースを始める。スタートだ」

ボタンを押すと、軽い鐘の音が響いてゲームが始まる。スタートの開始位置は凱旋門からだ。
「うわ、これやばいなぁ」
「難易度が高すぎよ！」
「まあ、マニアックは無謀だったな」
一部の神々はレースに夢中になり、自分達も遊びだす。他の連中は美容関連を取りにいったり、風呂にいったり色々だ。そう、風呂だ。ここにはスパリゾートを参考に水着を着て遊べる温水プールを用意したし、水上アスレチックも設置した。
当初に予定していたよりも施設が大掛かりになってしまったが、近くの住人から参加したいという言葉をもらったからだ。辺り一帯を買取、別の場所を買い取ってそこに社員寮を作成し、そこに移り住んでもらった。平屋を潰して三階から五階建てにすればそれだけでスペースに余裕はあるしな。それに……内部と外の空間は弄ってある。そう、実際のスペースは本来のスペースよりもかなり大きいのだ。これはショッピングモールも同じだ。
「ねえねえ、キャロル君」
「なんだヘスティア」
オレはショッピングモールにある三階に作られたカフェテリアで紅茶と作らせたケーキを楽しみつつ読書を行っている。オレにとって砂糖なども簡単に作れるので、ここの店舗にはレシピと一緒に安く売っている。出る利益もオレの収入だ。
「うちが完全に商業用ファミリアになってるんだけど……」
「ショッピングモールはオレの個人資産だ。関係ないな。あるとすれば孤児院と治療院か？」
「冒険者の治療だね」
冒険者達に薬草を取って来させ、代わりに格安で治療を施す。もっとも、ヘスティア・ファミリアが運用する保険に加入する事が治療の条件だ。月々に一定の金と依頼の品を収める。治療を安くしてもらえ、働けない間は一定期間の金を支給する。身体の欠損に関してはミアハから買い取った銀の腕を解析し、量産用に作ったダウングレード

品を販売。そいつの借金返済までショッピングモールの警備や商隊の護衛などで働く事を条件に施してやる。商隊は外に出して品物を運び入れさせないと怪しまれるからな。
　ちなみにこの保険。加入すると子供を預かって教育を施したり、両親が亡くなったりした場合、そのまま引き取る契約をしている。そのさいに親の残した資産は全て子供に引き継がせる契約をしてある。またヘスティア・ファミリアの緊急時には協力する事が義務付けられており、無視した場合は違約金が掛け金の１００倍を請求できる契約だ。支払い義務はファミリアにも及び、ファミリアはそいつを追放するか金額を支払うかの契約だ。
　ただ、人手が足りないので低所得者に仕事を与え、家が無い者達には住み込みで働かせている。ついでにいえば各ファミリアに入るための訓練所も併設させた。
「ミアハは喜んでいるけどね～」
「だろうな。オレ達が使っている薬品はほぼアイツから買っている」
　経営状況は借金もあるが、ミアハ・ファミリアに関しては孤児たちを弟子に取らせることで、人手を増やしている。ナァーザも忙しそうに頑張っているが、生産が追い付いていない。
「しかし、子供達が狙われないかな？」
「狙ってきたら潰せばいいだろう。保険加入者は全て味方だぞ」
　まあ、何人かは犠牲になるだろうが、一応は護衛をつけているし、教会の中に居る限りはどうとでもなる。
「やぁ、キャロル」
「フィンか」
「どちびぃいいいい！」
「ロキじゃないか」
　がらんとしている中、ロキとフィンがやってきた。ヘスティアはロキと遊んでいるので、放置する。
「座っていいかな」
「好きにしろ。どうせ、今日はどこも空いている」
「広さのわりに入っている人が少ないからね」

「あくまでも実験だからな。だんだんと人が増えていく」
「そのようだ。それでキャロル。ロキ・ファミリアに来るつもりはないかな？」
「そうやで！　キャロルちゃんなら大歓迎や！」
「オレの条件を飲めるならいいぞ」
「ちょっ！」
「条件はなんや！」
　ロキがヘスティアを羽交い締めにして聞いてくるので、答えてやる。
「まず、オレは好き勝手にさせてもらう」
「「え？」」
「次にオレが稼いだ金は全てオレの物だ。ファミリアには一切入れない」
「ちょ」
「施設を好き勝手に改造する権利をもらう」
「まさか、ドチビ……」
「ふふん、そうさ！　ボク自身はまだ貧乏なままだよ！　建物もほぼ全てキャロル君の持ち物さ！」
「うわぁ……」
「そういうわけだ。オレは誰かの下につくつもりもない。ヘスティアがこの条件と他にいくつかの条件を飲んだからオレは眷属になってやった」
「まあ、ボクも結構好き勝手にやってるけどね！」
　ちなみにこのせいで、ヘスティア・ファミリアに入ろうとする奴等は皆、止めて行った。当然だろう。かなり羽振りがいいと思ったら、全て団長の個人資産でファミリアとしては旨味がない。
　そもそも、この程度で諦める奴なら、必要ないし、オレが気に入ることもない。気にいれば支援ぐらいはしてやる。
「言っておくが、戦争遊戯でオレを手に入れようとしても無駄だ。ヘスティアには受けないように言ってある」
「へぇ、それはなんでだい？」

「決まっているだろう。ルールがありでは勝つのが面倒だからだ。場外戦闘ならオレ達は保険加入者を導入し、ゴーレムを使いながら民を扇動して相手ファミリアを潰せる」
「えげつないこと考えているな……」
「で、用事は勧誘だけか？」
「まさか。遠征が決まった。前に話した通り、ついてきて欲しい」
「いいだろう。オレもそろそろ潜ろうと思っていた。ただ、条件を追加させて欲しい」
「なんだい？」
「遠征の資金は全てオレが出す。だから、ドロップと魔石を全てオレに売れ。ギルドには税金として買った分から現金で支払ってやれ」
「それは、本気かい？」
「本気だ。オレは大量の魔石と深層のドロップが欲しい」
「ロキ」
「嘘はないし、相談してからやな。それにもう色々と買ってしまったし……」
「なら、それも買い取るぞ」
「ドチビ、こいつの資産って」
「ああ、君が思ってるよりも桁が違うよ」
　足を組み替えて本を読みながら話す。すでにここの文字は神聖文字も含めて覚えた。大気成分の解析もファルナもほぼ解析が終わった。後はダンジョンの深層と聖遺物の問題を解決するだけだ。
「じゃあ、考えておいてくれ」
「ああ、それとこれはロキと団長二人だけの秘密にできるのなら、もう一つだけとっておきのアイテムがある。それがあれば死亡率はかなり減るだろう」
「ほんま、やな。で、そのアイテムは？」
「支払うもの次第だ」
「何が欲しいのかな？」
「ロキの血と髪の毛。唾液など、神の身体のものならなんでもいい」
「ちょっ!?」

「……それは何に使うのかな？」
「答える気はない。ただ、ロキ・ファミリアがオレに敵対しない限り害はないだろう」
「ふむ」
「……つまり、神の身体を素材にするってわけか。ドチビ、こいつはそういう趣味なん？」
「違うよ。むしろ……いや、なんでもない」
「そうか。それならええよ。その程度で子供等が助かるんなら安いもんや。なんなら口移しでやるで」
「オレにそんな趣味はない。こちらが渡す容器に入れてくれるだけでいい」
「ちぇ～キャロルたんとなら寝屋でしっぽりとでき……」
「ロキ、リヴェリアに言うよ」
「すまん」
「で、そのアイテムはなんだい？　言われた通りにしよう」
「本気だよ。教えていいからね。それがキャロル君の大事な事に繋がるのなら、ボクは我慢しよう」
「フィン、こいつだ。他から見えないようにして見たら、ロキにも見せて燃やせ」
　紙を渡してからテーブルの上に炎を生み出す。二人をそれを見てから即座に燃やす。
「マジか」
「確かにこれなら、ボク達は喉から手が出るほど欲しい」
「壊してから使う関係上、多少のタイムラグはあるが……問題なく使える。情報の秘匿と出所を伝えないことで配布できる」
「出口は？」
「オレ達のホームだ」
「なるほど……即座に治療もできるってわけか」
「死亡率は格段に下がるだろう。使用は団長の判断に任せる。だが、大人数用は一つだけだ。使えば数億が飛ぶと思え」
「それは出してくれないのかな？」

「当たり前だ。オレにとってお前達が何人死のうが、知ったことではない。最悪、オレだけ戻ればいい話だからな」
「それは……」
「ロキ。彼女はあくまでも、ギブアンドテイクの関係だ。流石にそこまではもとめられない。ただ、さっきのロキが提供する物で少人数用なら何個かだしてくれるのかな？」
「ああ、それは出す。一つで五人。二十人ぐらいまでならいける」
「それなら、二つを除いて後方部隊に渡すこともできる。よし、ロキ」
「わかってるわい。それぐらい出してやる」
「契約成立だ。では、深層の情報を教えてくれ。必要な物を揃えて万全を期す。オレも無駄な犠牲は出すつもりがないからな」
「了解だ」
フィンと握手をする。すると、ニヤリと笑ったロキが――
「おっと、手が滑った」
――フィンを押しだしてくる。そのまま彼がこちらに倒れてきて、黄金の壁に阻まれる。
「これは……」
「なんやそれ」
「キャロル君の防御魔法だよ。彼女は鉄壁だからね。ロキもセクハラできるものならやってみるといいよ」
「ほほう」
「ふう」
フィンが障壁に手をついて反動で起き上がる。それからニコリとこちらに微笑んだ後、ヘスティアを指さす。オレもニヤリと笑って立ち上がる。
「あ、あれ、二人共どうしたのかな？」
「ふぃ、フィン？」
「おいたがすぎるね。お仕置きだよ」
「そういうことだ。少し頭を冷やさせてやろう」
「ま、待って、ここ三階！」
「しらん」

ロキとヘスティアを纏めて足を鋼糸魔弦で縛り、三階から放りなげる。二人は叫びながら落ちて行き、鼻の先に地面がつく直前に停止して解放してやった。
「じゃあ、深層について教えるからホームに来てくれ」
「いいだろう。だが、その前にテイクアウトしていくぞ。流石に他人のホームを訪れるのに手土産がないと駄目だからな」
「あ、そこはちゃんとするんだ」
「取引相手にはしっかりとする。で、何人だ？」
「それはね――」
大量のケーキを買って、一部はもっていく。それ以外は宅配を頼んだ。そもそも品物がなかったからな。
何か忘れている気もするが、まあいいだろう。

フィンと一緒にケーキを持ちながらロキ・ファミリアのホームを二人でくぐる。すると忘れていた何かを思いだした。
「あああああああああああああああああああああああああああああっ！　お前、だ、団長とで、デートおおおおっ！」
突撃してくるティオネを鋼糸魔弦で拘束してから入る。厄介な奴だよ、本当に。

第６話

さて、ロキ・ファミリアからの依頼を逆にスポンサーとなる事でオレが優勢に立つ。同時に深層を含めたダンジョンについての情報を全て教えてもらった。そこで是非とも手に入れたいアイテムが存在する事が判明した。そのため、オレは準備をロキ・ファミリアにお願いして合流先を決める。

合流場所はダンジョンの３０階層だ。

ロキ・ファミリアの荷物とミアに頼んだ大量の料理を受け取ってから、先に単身でダンジョンへと潜る。

ダンジョンに入ったら軍用トライクを呼び出し、そこに乗り込んでロキ・ファミリアで見せてもらったダンジョンの地図を参考に一気に下がる。防御システムとして障壁を展開しておけばオレが襲われることもない。

軍用トライクを使い、高速でダンジョンを駆け抜ける。モンスターを無視して移動に徹底し、大きな穴まで到着したらバイクを収納して飛び降りる。

錬金術で風を操り、そのまま空を飛ぶ。着地したら軍用トライクを取り出してまた移動だ。このような進み方を繰り返し、目標の階層に到着した。

到着階層は２５階層。ここから新世界と呼ばれるらしく。大瀑布『巨蒼の滝』が存在している。水の色は綺麗なエメラルドブルーで、飛び降りれば２７階層まで一直線らしい。飛び降りたらほぼ確実に死ぬようだ。高さが数十メートルから数百メートルはあるのだから無理もない。また、空にハーピィやセイレーンが大量にいる。

だが、そいつらを相手にするつもりはない。

「一応、着替えるか」

赤いワンピースの水着に服を錬成してから飛び込む。落下の衝撃を鋼糸魔弦や風を操ることで軽減し、そのまま水の中に入ろうとする

と、下から二つの頭を持つ数十メートルクラスの大きな竜が現れた。
おそらくこいつは階層主の双頭竜アンフィス・バエナだろう。
　オレの狙いは水中にあるので、こいつは邪魔だ。さっさと狩らせてもらう。まず落ちながら鋼糸魔弦を放ち、拘束した。続いて水の錬金術で水流を操る。奴も操れるようで防がれた。無理矢理操れるが、面倒だからな。だから、今度は水を対象にして錬金術を発動。氷へ返還させて沈んでいる身体の大半を動けなくする。
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッ!!」
「喋るな」
　氷の上に降り立ち、解析を開始する。水とドラゴン。どちらもガリィの素材としては申し分ない。しっかりと解析していると、口からブレスを吐いてくる。それを避けながら口の中にナパームを錬成し、叩き込んでやる。粘着性の発火液だ。着火させて体内からしっかりと熱してやる。
　水を司るドラゴンだけあって直に口から水を出して消火されたが、十分に呼吸器は傷つけられたようだ。どちらにせよ、しばらくは準備運動として踊ってやろう。

◇

　一時間ほど遊んでやれば解析が終了した。アンフィス・バエナの鱗は鋼糸魔弦で抉り取り、即座に錬成して分解と再構築を行う。これによって消滅する事を防ぎ、亜空間に仕舞う事ができた。
　また、その事を利用してアンフィス・バエナの身体を全て余すところなく抜き取ってドロップアイテムとしてやった。もっとも、錬成にはそれなりのフォニックゲインを使ったので雑魚モンスターには使えない。
「これで邪魔者は居なくなった。ご対面と行こうか」
　錬金術式を準備してから、水を操って穴を開け、風を操って空気を送る。その状態で水中を移動していく。底に到着すれば風を切り替えて、周りの水を空気に錬成し、水を操って移動する。呼吸で発生す

るＣＯ２は全て外に排出する。敵もくるが、鋼糸魔弦で斬り殺して亜空間にその周りの海水ごと収納する。

しばらく進んでいると洞窟が見えてくる。その洞窟を進むと行き止まりがあった。これこそがオレの狙いである巨大な生物の骨だ。

そう、こいつは……海の覇王リヴァイアサン。かつて、ゼウス・ファミリアとヘラ・ファミリアに倒され、そのドロップアイテムが海への道を塞いだらしい。その事から海竜（リヴァイアサン・シール）の封印と呼ばれている。

そう、こいつは水属性にして聖遺物ともいえる物だ。そもそもリヴァイアサンとは、旧約聖書に登場する海中の怪物だ。悪魔と見られることもあるが、どちらにせよ水に関する生物だ。ねじれた、渦を巻いたという意味のヘブライ語が語源であり、原義から転じて、単に大きな怪物や生き物を意味する言葉でもある。

旧約聖書では神が天地創造の５日目に造りだし、同じく神に造られたベヒモスとジズを含めた三頭一対を成すとされている。それぞれレヴィアタンとも呼ばれるリヴァイアサンが海、ベヒモスが陸、ジズが空を意味する。

ベヒモスが最高の生物と記されるに対し、レヴィアタンは最強の生物と記され、その硬い鱗と巨大さから、いかなる武器も通用しないとされる。世界の終末には、ベヒモスおよびジズと共に、食べ物として供されることになっている。

『ヨブ記』によれば、レヴィアタンはその巨大さゆえ海を泳ぐときには波が逆巻くほどで、口から炎を、鼻から煙を吹く。口には鋭く巨大な歯が生えている。体には全体に強固な鎧をおもわせる鱗があり、この鱗であらゆる武器を跳ね返してしまう。その性質は凶暴そのもので冷酷無情。この海の怪物はぎらぎらと光る目で獲物を探しながら海面を泳いでいるらしい。

本来はつがいで存在していたが、あまりにも危険なために繁殖せぬよう、雄は殺されてしまい雌だけしかいない。その代わり、残った雌は不死身にされている。また、ベヒモスを雄とし、対に当たるレヴィアタンを雌とする考えもある。

つまり、水を司るガリイにとっては最高級の素材だろう。ギルドと

ロキ・ファミリアの話を聞いて是非とも手に入れたい素材だ。
リヴァイアサンのドロップアイテムに触れながら解析を行い、成分を調べるが……流石にすぐには終わらない。亜空間に収納してから術式を走らせ続けるとしよう。
収納すると、当然のように道が開ける。その辺に放置されていたでかすぎるリヴァイアサンなどのドロップアイテムを回収し、代わりに錬成してしっかりと蓋を閉じておく。ダンジョンが振動したが、ただ海水が流入しただけだろう。しっかりと封鎖し……いや、良い事を思い付いた。
海側に到着する部分を完全に封鎖する。これは変わらない。続いて作り出した新たな壁に錬成陣を刻んで亜空間を新たに作成。そこに開いて海水やドロップアイテムなどが入り込むようにする。水が常に亜空間へと流入し続けることになるが、これでいい。ガリィの武器にもできる上に素材としても十分に使えるからな。
さて、洞窟に戻り、洞窟その物を強固に錬成し、鋼糸魔弦を網目状に配置する
これで外に行こうとするモンスターは鋼糸魔弦で細切れにされる。その後、ドロップアイテムへと変換されて亜空間に収納されるので、そこをガリィに回収させる。いっそのこと、亜空間をガリィに搭載するか。その方が効率がいいだろう。亜空間の錬成にアンフィス・バエナのドロップを使ったがよしとする。
これらの作業を行うのにかなりの時間を使ってしまったが、合流するために３０階層へと移動しよう。
「ふぅ」
海から出て、身体を震わせて少し休憩する。ポーションを飲んでから、タオルを取り出して身体を拭き、着替えていく。それから軍用トライクで３０階へと向かう。

◇

３０階。樹海が広がるジャングルだ。ブラッド・サウルスなど恐竜

が生息する危険地帯らしいが、オレにとっては何の問題もない。ロキ・ファミリアの連中が来てもいいように先に掃除しておく。

まずは鋼糸魔弦で周りの木々を伐採し、亜空間に収納。階段の前に広大な広場を作りあげる。約１０キロの広場を作り、続いて壁を錬成する。奥側の地面とジャングルを使い、その辺りを陥没させて堀もついでに作成する。作った堀には２７階層から供給される海水を放りだし、たっぷりと水を張ることで侵入を防ぐ。同時に結界を展開し、モンスターが結界内で産まれる事も防ぐ。

また、自動迎撃用に大量のバリスタ型のゴーレムを作成し、横に矢を作成する錬成陣を配置しておく。これの材料はこちらの兵士としてゴーレム達が木々を伐採して持ってくるよう調整すればいい。対空迎撃も含めて防御陣地の構築はこれで完了。

続いて内部の構造を作成する。簡単に土で作った家々を作成し、簡易的な宿にする。もちろん、上下水道を完備させ、シャワーやトイレは水洗だ。キッチンも用意してあるし、料理も可能だ。

「うむ。これでいいな」

寄ってくるモンスターは勝手に殺され、ドロップなどはゴーレム達が回収してくれる。ゴーレムに関してもなんだったか、手慰みに響がエルフナインに見せていたラピュタにでてくる兵器を作ってみた。そいつらなら、おそらく倒せるだろう。む、一応ゴーレム共の生産ラインも作っておいてやるか。あいつらなら、空も飛べるし、人を運ぶ事もできるだろう。

念の為、防壁の上にロキ・ファミリアの旗（預かっているテント）とヘスティア・ファミリアの旗を立てておいた。これですくなくとも冒険者が作ったものだとわかるだろう。

作り終えたオレは椅子に座り、机の上にリヴァイアサンの素材を使ったガリィの制作に入る。三大クエストと呼ばれるモンスターの素材だ。圧縮して基礎にすればそれだけで強くなるだろう。問題は動力炉だ。リヴァイアサンクラスの魔石が欲しいが、流石にそれはなかった。神を錬成して素材にするのもありだな。

◇

ガリィの設計図を改造していると、防壁の外が騒がしくなってきた。仕方ないので防壁の上に乗ると、複数の冒険者が悲鳴を上げていた。そいつらはゴーレムに囲まれ、後ろからブラッド・ザウルスの群れに接近されていたのだ。

「焼き払え」

オレの指示にゴーレム達は瞳を光らせると、複数の光線を放ちブラッド・ザウルスの群れを瞬殺していく。動力炉にヘスティアの炉を使っているんだが、火力が過剰だな。エネルギー……そうか、魔石でなくてもいいじゃないか。核や反物質炉。その辺りを使ってもいい。人類の英知を利用するのも構わないな。

「お、おい！　助けてくれ！」

「お願いします！」

「運んでやれ」

ゴーレム達が彼等を掌に乗せて空を飛び、こちらにやってくる。連中は心底驚いていたが、旗をみて安心していた。そんな奴等を迎え入れ、ポーションを渡してから、オレは椅子に座り、リヴァイアサンの解析と設計図の作成を続ける。

「あ、あの、この建物は……」

「見てわからないのか。作った」

「いやいや、ついこないだまでこんなのなかったから！」

「当たり前だ。二日程度だからな」

「えっええええ……」

「まあ、いい。それで他に人は……」

「まだ来ていない。後数時間から数日で到着するだろう。それまで休憩するか、帰るかは好きにしろ。建物は使うなら金を取る。中にはトイレやシャワーなどを完備している。宿と同じ扱いだ。値段はお前達の持っているドロップアイテムや魔石でいい」

「わ、わかった。頼む」
女性も居るので、喜んでいた。物を受け取ってから鍵を渡し、確認させるとすぐに追加で何室か借りていった。そこでふと思ったが、食事の問題がある。堀から釣りをすれば海の生物が取れるので、それでいいか。
問題は解決したな。ガリィの設計を続けよう。

◇

「君、なにしてるのかな？」
外でテーブルに向かいながら作業をしていると声をかけられた。振り返ると、唖然としたロキ・ファミリアの連中が居た。この数日間で何組かのファミリアがやってきたり、戻ってきたりしているが、彼等は驚いた後に施設の使用許可を求めてきた。
「フィンか。見ての通り、拠点を作っておいた。お前達の情報ではここから先は補給が難しいのだろう？」
「ああ、そうだが……」
「なら、ここでしっかりと休憩すればいいだろう」
「まあ、確かにね。じゃあ、ボク達も休ませてもらっていいかな？」
「幹部は残せ。他のファミリアの連中が要望をだしてきている。それとまともな旗を渡してくれ」
オレが指さすと納得してくれた。
「今は一応、キャロルの依頼で動いている扱いだから二つの旗か」
「ロキ・ファミリアの方が名声は高いからな」
「了解した。アイズ、ティオナ、ティオネ！　全員に休息と食事の準備をするように伝えてくれ！　ガレスとリヴェリアはボクと来てくれ」
「「了解」」
「アイズ、これが鍵だ。配っておけ」
「ん、わかった」

さて、オレは荷物を片付けてから中心部に鐘と円卓を錬成し、鐘を鳴らす。当然、全員が驚いてでてくる。
「ロキ・ファミリアが到着した。これより各代表において会議を開催する。代表者は集まるように。来ない奴の意見は知らん。３分で支度しろ」
「うわぁ」
フィンたちに引かれるが気にしない。どちらにせよ、円卓に座っている連中に飲み物を出してゆっくりと待つ。すぐに建物から飛び出してきた連中が席につく。中にはかなり服の乱れている女性や男性もいる。
「さて、会議を始める。議題はここの管理だ。まず、作ったのはヘスティア・ファミリアの団長であるオレ、キャロル・マールス・ディーンハイムだ。よって、ここの利権は全てオレにある。が、管理するつもりはない。だから、ここに居るファミリアに権利を売ってやる」
「協議制による分割統治という感じかな？」
「そうだ。まず、設備としては体験した通りだ。防衛に関してもゴーレム達が勝手にやってくれる。だが、運用する為には魔石と素材が必要だ。撃っているバリスタの関係もある」
「それを共同で出す事が最低条件というわけだね」
「ふむ。宿の使用は鍵を貸す時にしていいとして、食料の問題も色々とあるな」
管理せずに放棄する事も話し合うが、基本的に勿体ないということになった。やはり、安全な休憩場所といのは必要という事だ。
結果。各ファミリアが持ち回りで担当して、常に1パーティーが存在し、魔石を供給し続ける事になった。オレは食料やドロップアイテムの購買を行い、定期的にここまで運んでくることが決まった。転移装置を設置すれば容易いし、資金力があるのはオレだけなので引き受けた。
なお、この契約に参加するファミリアは義務を負う代わりにここを無料で使用できる。遠征のタイミングのついでにここで補給と魔石を補充してやればいい感じになるとのことだ。出た利益は基本的に

参加者に分配されるので、収入にもなる。
「では、話し合いは終わりだ。順番は決めた通りに。ボク達ロキ・ファミリアはこれから深層に向かうから、後にしてもらうが……」
「オレが補充しておいてやるから安心しろ」
「そうだね。それじゃあ、ボク達は休むよ」
オレはオレ専用のベッドで眠る。

◇

「キャロル。いいかい。世界を解き明かすんだ。そして、できれば……」

◇

「パパっ!?」
がばっと身体を起こし、頭に手をやる。久しぶりに父さんが燃やされる夢を見た。オレはまだパパからの命題を解き明かせていないというのか？　いや、違う。世界が書き換えられたんだ。だったら法則が変わっている。またやり直しだというのも理解できる。
「どちらにせよ、やることは変わらない……」
起き上がり、服を着替える。何時もの服に着替え、朝食としてミアに作ってもらった料理を適当に出して食べる。
食事をしていると、匂いに釣られたのか金髪娘がやってきた。
「じゃが丸君、欲しい」
「これか」
「ん、ありがとう」
「あ、私も。私はパンで！」
「わかった」
ロキ・ファミリアの連中に朝食を配り、戦闘準備を整えていく。
「キャロルはレベルいくつ？」

「秘密だ。だが、お前達に遅れを取るつもりもない」
「キャロルって本当に強いからねえ」
「当然だ。オレは世界だって敵に回せるからな」
「あははは」
「強く、なりたい。どうすればいい？」
「そうだな。まず手っ取り早いのは改造手術だ」
「駄目だよ！」
「改造……」
　改造案を伝えると、全部却下された。特に途中から入ってきたレフィーヤとかいうエルフに邪魔をされた。まあ、それでもアイズの身体を調べさせてもらった。すると少し面白い情報が手に入ったが、これは秘匿した方がいいだろう。
「そろそろ出発する！」
「「は～い！」」
　さて、冒険を始めようか。

◇

　数日かけて５０階層に到着した。ここは大荒野（モイトラ）。灰色に染まった木々がある荒野、亀裂のように走る川があり、灰色の大樹林が広がっており。高台も存在する。ここはセーフティーエリアであり、モンスターが湧かないので休憩をして下に潜るつもりだったが、問題が起きた。
　５１階層から新種のモンスターが現れたらしい。今回、オレは護衛される側なので基本的に守られている。しかし、流石にロキ・ファミリアの武器が溶かされるとそうも言っていられない。
「ウルガがっ、ウルガがぁぁぁっ！」
　芋虫の敵を殺した道具は奴の体液に浴びて溶かされていく。オレにとってもこの力は使えるので数匹を拘束して調べていく。調べ終わったらウルガとやらを錬成して渡してやる。

「やったぁぁっ！　ありがとうキャロル！」
「本物よりは弱いが、使い捨てが可能だ。サービスしてやる」
土のアリストテレスを使い、串刺しにいく。盛大に血液を噴き出してくれるので、解析できる。ついでに周りの地面を使って使い捨ての武器を作ってやれば壊されるのも気にせずに戦える。
そのままロキ・ファミリアの戦いに参加しているが、少ししたらレフィーヤが魔法を撃って終わらせた。それなりには使えるようだが、雪音クリスにはかなわないな。
変異した魔石ももらい、それを解析するが、情報が足りない。どちらにせよ、オレにとってはどうでもいい事だ。今回の目的はあくまでもガリィを作る素材集めだからな。

第7話

よいか。ハーレムは素晴らしい。お主も必ず英雄になってハーレムを作るんじゃ！

うん、ボク、頑張るよおじいちゃん！

そう思ってダンジョンがある迷宮都市オラリオにやってきた。ボクが住んでいた村とは違い、とても人が多くて広さも桁違いだ。

親切な人に案内してもらって冒険者になるため、ギルドに行った。そこで綺麗なハーフエルフのお姉さんに教えてもらったんだけれど、先に神様が作っているファミリアに所属し、神の恩恵をもらわないとダンジョンには入れないらしい。その人に紹介してもらったファミリアを訪ねてみたんだけれど……

「ファミリアに入りたいだと？」

「お、お願いします！」

「持参金は？」

「こ、これぐらいしかありません……」

「ヘスティア・ファミリアが運営している訓練所の卒業資格は？」

「な、なんですかそれ……」

「なら帰んな。どっちかを用意してこないと、あんたみたいなひょろっこいのは受け入れてくんないよ」

「そ、そのヘスティア・ファミリアの訓練所？　で、卒業資格を手に入れたら入れてくれるんですか？」

「あそこは孤児の子供達を訓練するついでに冒険者志望に戦う基礎を教えてくれているからね。あそこで最低でも二週間から一ヶ月くらい鍛錬して合格したら、まあ下層なら死なない程度には鍛えてくれるよ。悪いけど、アタシらとしても即戦力になるならともかく、基礎の

基礎を教える労力がかかるからね。持参金があるのなら、それを仕事として教育もできるが、ないんじゃ無理だしね」
「そうなんですか……わかりました。ありがとうございます。ヘスティア・ファミリアの所に入れるか聞いてみます」
「あそこはね……うん、最終手段ならいいんじゃないかな？　お勧めはしないよ」
「は、はぁ……」
どういうことなんだろうか？　一応、他の所も行ってみよう。

◇

色んなファミリアを回ったけれど、どこも断られた。持参金やヘスティア・ファミリアが運営している卒業資格があればいいと言われたけれど、持ってないよ！
そんな事を考えていたら、目的地であるヘスティア・ファミリアの大きな建物についた。ここはどうやら、ヘスティア・ファミリアが運営している施設らしいから、ここが訓練所なのかな？
「武器は預かります！　中での戦闘行為は一切禁止されております！　指示に従って頂けない場合、入場をお断りします！」
係りの人に短剣を預けて、中に入ると綺麗な建物で見た事がない物が動き回って掃除をしたりもしている。人が多く、買い物や食事を楽しんでいて、とてもお腹が空く。値段をみると、どれも村に比べると非常に高い。
それでも安い物を探すと、比較的に食材は安く、一階にある店はなんとか手が出る感じだった。二階から上は別世界だ。
『やあやあ、皆、元気かい！　私は元気だよ！』
突然、大きな声が聞こえてきて周りを探すと壁に映像が流れていた。そこに黒髪でツインテールの女の子が片手に棒を持ちながら喋っている。
『誰がドチビだこらぁっ！　まな板神は黙ってるんだね！　出禁にするよ！』

「やれるもんならやってみぃ！　キャロルたんの許可がなければできんやろうが！」
『ぐふぅっ!?　そ、その通りだよちくしょう！』
　いろんな所で笑いが起き、女の子は悔しそうな顔をしてから、ニヤリと笑った。
『でもさぁ、レースの運営権。選手を選ぶ権利はボクが持ってるんだよねぇ。例えば誰かを後ろに回したり、最後尾からスタートさせたりもできる』
「こいつ！」
『ふはははは、まいったか！　っと、他の神達にさっさと始めろと言われたから始めよう。皆、好きな選手に賭けたかい？　今回はロキファミリアとうちの可愛い団長君が遠征でいないから、ファミリア対抗戦だよ！』
「うちに対する嫌がらせやん！」
『なんのことかわからないね～。ボクのファミリアも参加しないんだから、公平だろ？』
「もとから一人やん！」
『さて、野次は無視してファミリア対抗について説明するよ。ファミリア対抗戦はその名の通り、神様を含む選手がバイクに乗ってリレー形式でタイムを図る。ステータスは各ファミリアが全員で合計レベル１０に収まるように設定するように。五人いるどこに偏らせてもいいし、平均にしてもいい。レース中もピットインしたら変更可能だ。もちろん、妨害もありだ。賞金はモール内で使える食事券１０万ヴァリスとゲームの優先参加券。そして、ランキングポイントだ。うんうん、できたみたいだね。おっと、一番人気はフレイヤ・ファミリアか。ていうか、オッタルをだしてくるなよ！　まあいいや。それじゃあ、開始するよ。よーいスタート！』
　馬みたいなのが一斉に走り出していく。色んな人が目に何かをつけて楽しんでいる。聞いてみたら、ほとんどの人が神様みたい。
　でも、こんな大きな施設を運営しているファミリアが、ボクみたいな断られてばかりの人を受け入れてくれるのかな……

◇

話を聞いて間違いに気付き、大きな教会の方にやってきた。そこで金色の髪の毛をした綺麗なシスターさんに聞いてみると、訓練所はいっぱいで二ヶ月先まで埋まってしまっているらしい。

それを聞いてボクは思わず飛び出して、どこをどう走ったのかもわからない。それに途中で誰かにぶつかってしまい、何時の間にか財布もなくなっていた。

裏路地で座り込み、お腹が空いて動きたくもなくなってくる。ボクは冒険を始めることもできないのかな……

「みつけたよ！」

「え？」

顔を上げると、そこには壁に映っていた女の子が座り込むボクの前に視線を合わせてしゃがんでいた。

「シスターから聞いて慌てて探していたんだよ。君、訓練所に入りたいんだって？」

「は、はい……でも、お金も何時の間にかなくなっちゃって……」

「ふむふむ。それなら、ボクのファミリアに来るかい？」

「え？　いいんですか？」

「良いも何も、常に募集中さ。もっとも、誰もきてくれないけれどね！」

「あ、あんなに立派な建物を持っているのにですか？」

「アレ、全部団長の個人資産なんだ。つまり、ファミリアにお金は一切ない！」

立ち上がって胸を張って答える女の子に思わず噴き出してしまう。

「ボクと同じですね」

「そうだよ。働けども施設のレンタル代や、子供達の食費などで消えていくんだよね～キャロル君ってボクにはとっても厳しいんだ。あ、

キャロル君っていうのが団長だね。でも、団長としての業務なんてほぼやってくれないから、入ってくれたら君にやってもらうことになるかも。ちなみにこんな理由でボクのファミリアに入ってくれる人はいない。だって、訓練して別のファミリアに行った方がいいもんね」
　確かにそうだ。それに聞いたら、ファミリアの現状を勧誘の時にしっかりと伝えるようにも指定されているらしい。
「そうなんですか……できないと思いますよ？」
「なに、色々と教えてもらえばいんだよ。キャロル君を説得だってするし」
　どうやら、神様にとってその団長さんはとっても厳しい人みたい。団員にも厳しいのかな？
「まあいいや。で、どうだい。ボクの家族になってみないかい？　少なくとも衣食住は保証するぜ！」
「こんなボクなんかでよければ、よろしくお願いします、神様」
「うん。よろしくね。ボクはヘスティア。君の名前は？」
「ベル。ベル・クラネルです」
　こうしてボクはヘスティア・ファミリアに入る事ができたみたい。神様に手を繋がれて、凄く大きな教会、大聖堂に戻るとシスターが迎えいれてくれた。
「戻ったよ、シスターちゃん」
「無事に見付かって良かったです。これもヘスティア様の日頃の行いがよいからですね」
「そうだろう、そうだろうとも」
「それで眷属になられたのでしょうか？」
「そうだよ」
「ベル・クラネルです。よろしくお願いします！」
「はい、よろしくお願いします」
「ところで、シスターちゃんもボクの眷属にならないかな？」
「……私は子供達の世話もありますし、戦いではなんの役にも立たないですから……それにキャロルさんの許可をもらわないと……」
「まあ、考えていてよ。それより、今日は歓迎会として何処かに食べに

行こうかい」
「いいんですか？　怒られますよ。それにキャロルさんが戻ってきてからの方が、お金も出してもらえますよ」
「……それもそうだね。ごめんね、ベル君。歓迎会は少し待ってくれるかな？　ちゃんと美味しいご飯は食べられるようにするから」
「お、おかまいなく！」
「とりあえず、部屋にご案内しますね」
「お願いします」
　建物を案内してもらうと、本当に広い事がわかった。施設も豪華だし、中庭では子供達が遊んでいる。別の場所ではいろんな人が訓練していた。
　貰えた部屋も凄く広くて、ベッドも質のいいので凄く柔らかい。タンスや本棚まであり、まるでボクが住んでいた家が部屋になったようにすら感じる。
「ボクの部屋は隣だよ。シスターちゃんの部屋はその隣。子供達の部屋も奥にある」
「団長さんの部屋はどこなんですか？」
「あの子の部屋は地下だね。まあ、ボクと一緒に寝る時はボクの部屋になるけど」
「そうなんですね」
　一緒に寝てるなんて、仲が良いのかな？
「子供達はいいけれど、風呂の順番やトイレの使用中かどうかは確認してくれよ。シスターちゃんやボクも一緒に住んでるからね」
　想像したら真っ赤になってしまう。
「わ、わかりました」
「部屋は悪ガキもいるから鍵をかけるように。物を取られる心配もある。まあ、ベル君は大丈夫だけど下着を取るような馬鹿もいるからね」
「き、気をつけます」
「じゃあ、上を脱いでそこに寝転がって。ファルナを刻むし、その次が武器を選ぶからね」

「は、はい！」
上を脱いでベッドに寝転がり、ファルナを刻んでもらう。特に変わったようには感じなかった。でも、これでボクは冒険者になれたんだ。

◇

次の日から武器を選び、そのままダンジョンに……と思ったけれど、アドバイザーのエイナさんに言われて勉強と訓練にあてる。
数日過ごし、理解したのはボクが弱い事と、シスターさんの料理が美味しくて、優しい事。怪我の治療とかもしてくれる。神様は皆の食費を稼ぐのに忙しいみたいで、働きにでている。
ボクもシスターさんのお手伝いをして、子供達と一緒に遊んでいく。遊びといっても戦闘訓練も兼ねた奴らしく、ボクが一人で他は全員で叩いたり蹴ったりしてくる。それを防ぐ訓練だ。
それに慣れたら、豊穣の女主人でシルさんからお弁当をもらう。彼女とは訓練中に食事ができる場所として神様に連れていかれた。ここでなら、朝と夜だけは無料で食べさせてもらえるらしいとのことだ。何故かお昼はシルさんがお弁当をくれることになった。
お弁当を貰ってからダンジョン探索の許可をもらって順調に狩りを進めていく。調子に乗って奥に進んでいくと、絶望が居た。

牛頭人身の怪物、ミノタウロス

必死に逃げた。でも、袋小路に追い詰められてボクは死を覚悟した。でも、ミノタウロスが綺麗な金髪の女性に斬られて、ボクは血塗れになり、彼女を見詰めていると胸が熱くなって、お礼も言えずに逃げだした。

◇

エイナさんから彼女がアイズ・ヴァレンシュタインだと教えられ、ボクは彼女に――いや、なんでもない。

そして、ボクはシルさんにお弁当箱を返し、そこで食事をしているとロキ・ファミリアが入ってきて、狼の人に色々と言われてボクはここでも逃げ出してしまい、そのままダンジョンに向かった。

第８話

遠征部隊は５０階層で撤退。それがフィンの下した結論だった。流石に第一級冒険者の装備が破壊されては、このままでは進めない。一応、パトロンになっているオレにも相談されたが、フィンに任せた。

オレとしては既に欲しい物は手に入れているし、５０階層の一部に転送用と観測用のマーカーを仕込んでおけばいい。

そんなわけで皆で帰宅だ。オレはラウルに背負わせて、そこで本を読む。荷物も全てオレが持っているからこそ、可能な方法だ。そんな風に進んでいると、壁から大量のミノタウロスが現れ、そいつらが地上に逃げだした。

「キャロル、君は……」

「オレは知らん。このまま帰るから勝手にしろ。荷物と金は合流できなければ後で届けてやる」

「わかった。頼むよ。全員で追え！」

オレは一人になってから、歩いてゆっくりと追っていくと、上層まで逃げだしたようだ。ミノタウロスのくせに頑張るじゃないか。

「ぶもぉおおおおぉぉぉぉっ！」

壁から湧いてきたミノタウロスがオレの邪魔をする。しかし、実験するには丁度いい。ミノタウロスを拘束し、芋虫共から手に入れた魔石を使って改造を行う。

分解し、ミノタウロスにしては弱すぎる存在を原初の存在として再構築する。が、失敗して灰へと消えた。だが、ミノタウロスのデータは手に入れたので、ゴーレムとして再現して訓練相手にするのもいいかもしれない。どちらにせよ、さっさと帰るか。

◇

そのまま歩いて上層まで移動していると、フィン達に追いついた。どうやら、掃討は終わったようだが、アイズが気落ちしている。ベートが必死に気を引こうとはしているな。

「どうしたんだ？」
「えっとね、アイズが助けた子に逃げられたらしいの。詳しい事はわかんないんだけど」
「そうか。まあ、オレに関わっていないのならどうでもいいな」
「冷たいね～」
「そもそも別ファミリアだぞ」
「それもそっか。でも、私はキャロルと友達になりたいな～」
　ティオナがよりついてくるが、無視をしてそのまま進む。
「そういえば、団長が明日、豊穣の女主人で打ち上げをするから来てくれたら助かるって」
「わかった。どうせミアの所で食事をするつもりだったからな」
「やったー！」
　何が嬉しいのかわからないが、そのまま移動してダンジョンから出る。それからロキ・ファミリアのホームへと寄って、彼等の物資を渡す。オレが購入したものはそのまま保存し、彼等が買った念の為の奴だけだ。
　もちろん、消費しているのはオレが持っていった奴からなので問題ない。物資を置けば次に査定をしてドロップアイテムや魔石を買い取る。ギルドよりも高値に設定し、必要な代金をリヴェリアに支払って終わりだ。
「今回の遠征は随分と助かった」
「それはオレもだ。また何かない限りは遠征する時は言ってくれ。スポンサーぐらいにはなってやる」
「了解した。それとテントについてだが……」
「欲しければ大量購入で多少は割り引いてやる」
「わかった。ではこれぐらいで……」
「それなら……」
　リヴェリアと交渉し、今回使ったテント類など、便利アイテムを全て売り払う。ロキ・ファミリアの収入はほぼ飛んだが、次から色々と楽だろう。少なくともトイレとシャワーつきは女性陣の強い要望があったから、男性陣は折れた。

◇

ヘスティア・ファミリアのホームである大聖堂に戻ったオレを迎え入れたのはここでシスターとして働いている奴だ。顔色を見るが、少し疲れが見える。かなりの人手不足だから仕方がない。
「おかえりなさいませ、キャロルさん」
「今戻った。それで、オレが留守中に何かあったか？」
「ヘスティア様が眷属をお一人、お作りになられました」
「ヘスティアが……そうか。肝心のヘスティアはどこだ？」
「今日と明日はショッピングモールで女神フレイヤ主催の神々の宴が広がれるそうで、そちらに準備に出向いております。新入団員の方はダンジョンですね。夕食は豊穣の女主人で取られるそうです」
ヘスティアも新人も居ないのなら、後回しでいいか。
「わかった。それなら、明日の夜にでも豊穣の女主人に向かおう。それまでやる事があるから、時間になったら呼んでくれ。それまで誰も通すな」
「わかりました」
「それと余った料理があるからそれを子供達の食事にしてやれ。あと、明日は子供達の食事が終わればお前も一緒に来い。奢ってやる」
「いいのですか？」
「ああ、構わない。子供達を連れて行ってもいいが、流石に迷惑だろうしな」
「そうですね。でも、お世話はどうします？」
「2，3時間の間だけなら大丈夫だろう。一応、子供達には大人しくしていれば明後日、一人二つまでショッピングモールで菓子を買っていいと伝える。これで大人しくなるだろうさ。シスターも少し休め」
「ありがとうございます」
シスターと別れてシャトーの工房へと移動する。そこでリヴァイアサンのドロップアイテムや、今回手に入れた素材を出していく。思い出を収集し、焼却する事で膨大なエネルギーを生み出す錬金術。ま

た、それによって作られた人形のオートスコアラー。
しかし、普段から運用するエネルギーとしては些か問題がある。出力が高いが、燃費も非常に悪いのだ。そこで目をつけたのが魔石だ。魔石を吸収してエネルギーを蓄えさせる。これ以外にも別の炉心を搭載する事である程度は扱えるようになるだろう。
さて、問題はどのエネルギー炉を搭載するかだが、それは既に決めている。世界を分解し、万象黙示録を不完全とはいえなしとげたのだ。星の発生と終わりは理解している。だから、それを利用して縮退炉、ブラックホールエンジンを作りだす。もっとも、そのものというわけではないが、吸い込み分解し、再構築するという構造にするので錬金術と相性がいい。
まず、リヴァイアサンのドロップアイテムを分解し、ミアハの素材を含めて再構築を行ってガリィの肉体を錬成する。炉心に必要な壁なども全てリヴァイアサンで補うし、ヘスティアの素材も投入する。でかすぎるリヴァイアサンのドロップは圧縮して強度を上昇させる。アンフィス・バエナの素材やあの芋虫も投入する。これで馬鹿みたいな強度な肉体が完成する。
後はオレの記憶からガリィのデータを呼び起こして転写すればいい。聖杯はすでに解析できているので、黄金錬成を行い、生み出す。必要なエネルギーはヘスティア・ファミリアの炉から生まれる物を使えば大丈夫だ。こちらも余ったリヴァイアサンの素材を使う。
「よし、開始しよう」
溜め込ませていた炉心のエネルギーと愚か者共から採取した想い出を焼却して、リヴァイアサンの一部と魔石を合わせて錬成する。完成したのは黄金ではなく、紺色に輝く聖杯。
手に持ち、少し力を流すと、膨大な水が生み出される。その水に触れた物は溶けていく。聖杯に戻すと、中身は綺麗に戻った。溶かされた分はしっかりと吸収されている。使い手の意思でオンオフできるようにしてあるので、問題ないだろう。身体を作成するのにアイズのデータを参考にすることで、より人間らしくありながらも精霊に近付ける。

「ソーマでも買って突っ込んでみるか……何か連中が仕掛けてくれたら嬉しいのだがな」
まあ、聖杯は完成した。身体の錬成も始め、鋼糸魔弦を使って組み立てるだけだ。自動で肉体を生成するようにして――
「キャロルさん、お時間ですよ」
「わかった」
――上から連絡が届いたので後は生成を開始させて場所を離れる。何時の間にか日付が変わっていたようだな。
「もう少しだ。待っていろ、ガリィ。今度はオレがお前達を助けてやる」

◇

「徹夜していたんですか……」
「まあな……」
「では、まずお風呂に入りましょう」
「面倒なんだが……」
「駄目ですよ。女の子なんですから、綺麗にしないと」
「あ～」
シスターに風呂へと連れていかれ、綺麗に洗われる。交代してオレも洗ってやる。しっかりとお湯で温まってから服を着替えて移動する。今回はオレも彼女も白いワンピースだ。そんな状態で手を引かれながら移動していく。
「そういえば、新入団員が入ったのだったか……」
「はい。名前はベル・クラネルさんです」
「ベル・クラネルか……どんな奴だ？」
「髪の毛の色が白くて、目が赤いんです。なんでも英雄を目指しているとか」

「は？　もしかして、一人称はボクか？」
「よくわかりましたね」
　その言葉から連想できる奴はアイツだが、アイツが生きているはずないだろう。いや、ネフィリムと融合していたのだから、蘇った可能性は……ないな。おそらく別人だろう。
「あ、居ました。あの方がベルさんです」
「ん？」
　見ると、豊穣の女主人から飛び出し、走り去っていく白髪の後ろ姿が確認できた。店の中からはシルとアイズが追ってでてきたようだ。
「どうしたんでしょうか？　気付いてもおかしくないはずですが……もしかして、私は嫌われているんでしょうか？」
「シルに聞いてみればいいだろう。シル」
「あ、キャロルさん」
　アイズが中に入ってから、こっそりとシルを裏に呼び出して聞いてみる。
「何があった？」
「えっと、それは……」
「先程の奴はオレの所の団員みたいでな……話せ」
「わ、わかりました。実は……」
　詳しい内容を聞くと実に不愉快な内容だった。これが別のファミリアならオレは無視したが、オレが団長をしているファミリアとしてなら話は別だ。要は侮辱されて喧嘩を売られたということだからな。これが普通にダンジョンに潜っていて起こったことなら、まあ仕方がないだろう。だが、今回の件はロキ・ファミリアがミノタウロスを上層に逃がした事が原因だ。ミノタウロスが上層に現れるなど普通は想定されていない。それを原因のファミリアが笑い話にしたということだ。
「今日の客はロキ・ファミリア以外にも居るか？」
「はい。ロキ・ファミリアのお客様以外にも数組いらっしゃいます」
「そうか。ミアを呼んできてくれ」
「わ、わかりました……」

「シスター、悪いな。予定変更だ」
「いえ、大丈夫ですが……やりすぎないでくださいね？」
「安心しろ。狙うのは駄犬一匹だ。シスターはヘスティアに連絡して探させろ」
「は、はい」
　それから少しして、ミアがでてきた。彼女に事情を話して金を支払う事で同意してもらった。また、客に金を支払って別の場所で飲み食いしてもらう。その費用も含めてオレが全て出す。これはファミリアの抗争だから、ミアも納得してくれた。
　さて、準備が完了したのでダウルダブラのファウストローブを身に纏い、部屋の中に歌いながら入る。
「あ？」
「なんだ？」
「キャロルだ！　こっちだよー！」
「逃げろ!!」
「遅い」
　フィンの親指が何故か曲がっているが、全員の拘束を鋼糸魔弦で完了した。歌でブーストしている今の鋼糸魔弦を突破する事など、それこそ奇跡でも起こさない限りは不可能だ。
「どういうつもりだてめぇっ！」
「それはこちらの台詞なんだがな。ああ、忠告しておいてやる。無理矢理動こうとしたら手足が取れるぞ。それに貴様等が動く前にオレがロキの首を落とす。これでファルナに頼っているお前達は終わりだ」
「っ!?」
「嘘やないな。で、説明してくれるんやろな、キャロたん」
「キャロたん言うな。なに、貴様等がさっき笑っていたのは会った事はないが、どうやらうちの女神が新しく入れた団員のようでな？」
「「あ」」
「売られた喧嘩を買っただけだ」
「それでここまでするん？」

「いや、お前達を拘束したのは邪魔をさせないためだ。オレが今からベートにする事に関して関与しないのであれば、すぐにでも解放する」
「嘘やないね。なら、条件つきで許したるわ」
「言ってみろ」
「まず、殺さないこと」
「いいだろう。オレも殺すつもりはない。というか、ロキならオレに泣いて感謝するだろう」
「マジ？」
「ああ、そうだとも」
「待ってくれ。それは戦力が落ちたりするかい？」
「一時的にするだろうな。だが、取り戻すのは奴次第だ。それどころか、更に強くなれるかもしれんし、解除条件も設定する。要は罰として試練を与えるだけだ」
「ロキ」
「本当みたいや。わいはええと思うで。今回の件はうちらの責任や。せやのによそ様の子供を笑ったんや。罰を与える必要はあるやろ」
「わかった。この件に関しては先に言った事について守られるのなら、ボク達は関与しない」
「了解した」
　指を鳴らして駄犬以外の拘束を解除する。駄犬は口もしっかりと塞いでぐるぐる巻きにして吊るしてやる。
「ああ、そうだ。ロキ、今からする質問に答えてくれ。それでコイツの罰が変わる」
「ええで。なに？」
「ロキは駄犬とアイズ、どっちが好きだ？」
「もちろんアイズたんやで！」
「では、駄犬が好きなのは？」
「アイズたんやね！」
「ん～～！」
「なるほど。アイズの今の姿と子供の姿ならどちらが好きだ？」

「難しい質問やね。今のアイズたんも可愛いけど、あのころのアイズたんも可愛いからな」
「うむ」
　リヴェリアも頷いた。
「アイズ、できるのなら妹と姉、どっちが欲しい？」
「……？　妹？」
「この質問って、まさか……」
「喜べ。貴様の罰が決まった」
「んん～～～～～～～～～～～！」
　駄犬を地面に降ろして顔面を踏みつけながら、錬成陣を描く。続いて設定通りに奴のファルナを改竄してエネルギーへと変換。奴の身体が分解され、再構築されていく。
「うひょおおおおっ！」
　ロキが現れた駄犬に声を上げながら飛びついて頬擦りしだす。
「や、やめろっ、ろきっ！」
可愛らしい声で必死に抵抗するが、小さな身体では碌な力が入っていない。
「これは……」
「犬耳銀髪ロリアイズたんや！」
　そう、駄犬の特徴をそのままに身体構造をアイズの物に変化させて圧縮した。レベル1に下がっているが、スキルや魔法はそのままだし、精霊の血も入っている。つまり、犬耳と尻尾が生えた幼い銀髪のアイズ・ヴァレンシュタインというわけだ。ちなみに首には鉄の首輪があり、鎖は途中で壊れている。
「良かったな、駄犬。アイズが好きなんだろう？　好きなアイズになれたぞ」
「ふざけんなぁあああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁっ！」
　他のメンバーが唖然とする中、アイズはふらふらと近寄って耳や尻尾を触り出した。
「せ、戦闘能力はどうなっているのかな？」

「レベル1からやり直しだ。だが、スキルはそのままだ。身体能力は多少は下がっているだろうが、素質という面ではかなり上昇している。おそらく、レベル1で駄犬が2の時の強さはあるだろう」
「なるほど……問題は肉体の構造の変化とリーチか」
「キャロル。これは完全に女なのか？」
「ああ、そうだ」
「戻せ！　もどせぇえええええ！　それかいっそころせえええぇぇえええええええええぇぇぇぇっ！」
「い・や・だ・ね！　戻す条件はまず、同レベルまで戻す事。それを達成した時に相手を心の底から愛し、子供を産んでもいいと思った時だ。ああ、もちろん、相手の遺伝子を貰ったら戻る事ができる」
「うわぁ」
「すっごい嫌がらせ……」
「安心しろ。自害もできん。その首輪が再生を促す事で禁止している。首輪には他にも駄犬のレベルが戻るまで、経験値をブーストしてくれる。それとこの腕輪と連動していて、相手の位置や鎖を繋げたりお仕置きしたりもできる機能がついている。これをアイズとロキ、フィン、リヴェリア、ガレスに渡そう。好きに扱うがいい」
「外せるんだよね？　流石に幼い少女に首輪をつけていると、外聞が悪いんだが……」
「外せるが、本人が望むかは知らん。経験値ブーストアイテムだからな」
「やれやれ、頭が痛い……」
ファウストローブを解除し、改めてロキ・ファミリアをみる。
「では、オレは逃げたアイツを追う。明日にでも伺わせてもらう」
「わかったよ。本当に解除条件はそれだけ？」
「そうだな。アイズがそいつの女になるというのなら、解除してやっても——「絶対に嫌」——だそうだ。先の条件だけだ。まあ、オレの気がかわるかもしれんがな」
「了解した」
さて、次は新入団員の所に向かうか。

◇

豊穣の女主人から逃げて、ボクはダンジョンでひたすら戦っていく。悔しくて悔しくて、辛い。強くならないといけない。もっと、もっと強く！

「ＢＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ!!!」

「え？」

奥にある壁が光ったと思ったら、そこから黒いミノタウロスがでてきた。そいつは明らかに禍々しい大きな剣を持っていて、四ツ目がボクを見詰めてニヤリと笑う。

「ひっ!?」

急いで振り返り、走ろうとすると小さな女の子が地面にへたり込んで両手をついていた。ダンジョンに出会いを求めたら、本当にあったよおじいちゃん。でも、死のピンチだ。

「逃げるよ！」

「あ」

彼女の手を掴んで必死に走る。後ろから黒いミノタウロスが追いかけてくる。相手の方が明らかに速い。

「なんで、なんで二日連続でミノタウロスに追いかけられないといけないんだぁ！」

「あ、あの、ボクを捨てていけば、その間にあなたは、た、たすかります！」

「そんな事できないよ！」

通路を曲がり、必死に走る。でも、全然出口に通じないし、他の冒険者にもあわない。同じような道をひたすら走っているだけだ。後ろのミノタウロスはそんなボク達を追ってきている。どうにか逃げているけれど、連れている女の子はもう息も絶え絶えだ。

「え？　嘘！　なんで！」
　道なく、行き止まりに入ってしまった。いや、小さな穴がある。ボクか彼女一人だけは入れるような穴だ。穴の先には間違いなく通路があり、どちらかが囮になっている間に抜けられると思う。
「ぼ、ボクが囮になります！　どうせ、ボクはもう走れません。ここで死ぬんです。だから、あなただけでも！」
　震える彼女はそういいながら、短剣を取り出している。足ががくがくで、とてもじゃないが勝てそうにない。それはボクも同じだ。
「……ごめんなさい神様……」
「え？　なにを……」
　彼女の服を掴んで押し倒すようにして穴に押し込む。
「ボクが囮になるから、逃げて！　」
「で、でも……ボクの足じゃどうせ他のモンスターに襲われて死ぬだけです！」
「生きるのを諦めちゃ駄目だ！　どうか、他の人を呼んできて！　」
　短剣を構えて前に出る。ミノタウロスは大きな剣を振りかぶる。その姿がまるで通路全体を覆うかのように巨大な存在に見える。
「っ!?」
　振り下ろされた大きな剣を避ける。地面が粉砕されて大きな傷が刻まれた。当たれば一撃で死ぬ。怖い。怖くて逃げたい。後ろをみればまだ彼女はここにいて、震えている。
「……逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ……ボクは、ボクは……あの人に追いつくんんだぁっ!!」
　震える身体がなんだ。ボクの後ろには震えて怯えている女の子がいるんだ。守らないといけない。絶対に逃がしてあげるんだ！　だから、動け！　英雄に、彼女の英雄になるんだ！
「うぉおおおおおおおおぉぉぉっ！」
　突撃し、横薙ぎに振るわれる大きな剣をスライディングで滑りこみ、短剣を身体を起こしながら足を切りつける。金属音がして、短剣が砕けた。そのまま転がって反対側に立つ。
「そのまま逃げて！　ボクが囮になるから！」

「っ!?」
「駄目だ！　速く穴に入って！」
　彼女はでてきてミノタウロスに近付く。ミノタウロスはボクの方など無視して、彼女の方に近付いて大きな剣を振り下ろす。彼女は避けることもできないだろう。だから、飛び込んで彼女を抱きしめて必死に転がる。
「なんで、なんで助けた」
「当たり前だよ。ボクは君を助けるって決めたから……」
「甘いよ……自分の命よりも、見ず知らずの女の子の方が大事、なの……？」
「どっちも大切だよ！」
「そう……なら、死ね」
「え？」
　彼女の短剣がボクの腹に突き刺さり、お腹が熱くなる。痛い、痛い、痛い、どうして、なんで！　彼女をみると、彼女は立ち上がって服の埃を払う。そして、ボクをゾッとするような冷たい目で見詰めてくる。身体なんて震えてもいない。でも、でも……
「望み通り、ここで死ぬといい」
　彼女は踵を返し、穴を通ってそのまま通路の先に出ていった。残されたボクの目の前にはミノタウロスがいて、大きな剣を振りかぶっていた。
「……ごめんなさい、神様……でも、一人は助け、られたのかな……？」
『ベル君。ボクは君の帰りを待っているからね！　必ず帰ってくるんだよ！』
「っ!?　駄目だ！　諦めない！　生きるのを諦めてたまるかぁぁぁぁっ！」
　腹に刺さっている短剣を引き抜き、がむしゃらに大きな剣にあてると、不思議な音がして大きな剣が折れた。この短剣は無事だった。
「こ、これならっ！」
　起き上がってミノタウロスに挑む。勝てる。勝って見せる！　そう思った瞬間。ミノタウロスの拳がボクのお腹にきまり、吹き飛ばさ

れて壁に激突する。
「こんな時、アイズさんが助けにきてくれるのかな……ないかな」
　でも、彼女が逃げ切るまでは時間を稼いだと思う。これで、いいよね、おじいちゃん。
「ないな」
「え？」
　目の前に広がる金色の髪の毛にアイズさんだと思えたけれど、違う。彼女は穴から逃げた子だ。
「なんで、なんで逃げてないの！　ボクを刺してまで生き残ろうとしたんじゃないの！」
「貴様は阿保だな。なんで逃げないだと？　そもそも、何故おかしいと思わん」
「え？」
　彼女に迫っていたミノタウロスは、彼女の隣にしゃがみ込む。彼女はミノタウロスに触れると、その身体が光りになって土になっていく。
「ま、魔法？」
「そうだ。だいたい、二日連続で上層にミノタウロスが現れるなど、どんな確率だ。明らかに誰かの意思が介入しているだろう」
　彼女は何処からともなく、ポーションを取り出して、それをかけてくる。傷口が凄く熱くなってくるけど、治っていくのがわかる。
「また、明らかにおかしかったはずだ。戦闘能力もないような子供の外見をした者が、ダンジョンでろくな装備もない状態で一人でいるわけがないだろう。罠を疑え」
「うっ」
「貴様は色々と甘すぎる。まるでアイツみたいだ」
「あ、あの、あなたは？」
「そんなものはダンジョンを出てからでいい。さっさと見捨てると思っていたんだがな……とんだ時間の無駄だった」
「え、えっと」
「ちっ、帰ると言っているんだ。男なら立ってオレをエスコートしろ」

「は、はい！」
　彼女が手を壁に触れると、目の前の土壁が崩れて別の通路が現れた。もしかして、ボクが走っていたところって一周するようになっていて、ぐるぐる同じ場所をまわっていただけなのかもしれない。
「あの、あなたは……」
「黙れ。オレは疲れているんだ。さっさと帰って寝る。こっちは徹夜明けなんだぞ」
「え～」
　理不尽な感じがする。いきなり現れてボクを罠にはめて、あんな事をしたのに。エイナさんに報告したら、これってどうなるんだろ？
　そのまま眠そうな彼女を案内して外に出る。ダンジョンの前にはシスターさんやエイナさん。それに神様が居た。神様はシスターさんの胸で泣いていた。
「ベル君！　良かった、無事だったんだね！　良かった、良かったよ！
　キャロル君が迎えにいったから、無事だとは思っていたんだけど……」
「キャロル？」
「君と一緒に出てきた子の事だよ」
「え？　あ、そうだ！　エイナさん、実はミノタウロスに……」
　ボクがあった事を話していくと、全員の視線がキャロルと呼ばれた女の子を見詰める。それから、呆れた表情をしながら、エイナさんがボクをみた。
「キャロル・マールス・ディーンハイムさん……苦情がきていますが……」
「知らん。これはダンジョンを使った試験だ。それにちゃんと問題ない場所に誘導した。あの程度の相手に挑む気概の無い奴など必要ないから」
「冒険者は冒険したら駄目なんですよ！」
「それは貴様の理論だ。オレのファミリアには関係ない」
「っ～～～！　ヘスティア様！」
「まあまあ、アドバイザー君。で、キャロル君。結果は？」

「二人でダンジョンに向かわせるのは許可できん。こいつは騙されて食い物にされるのが目に見えている」
「なるほど、合格というわけだね！　やったね、ベル君！」
「ご、合格？　神様、どういうことですか？」
「どうもこうも、君は正式に我がヘスティア・ファミリアに入団できたということだよ！　だよね、キャロル君！」
「え？　え？」
「ちっ、察しが悪い。オレはキャロル・マールス・ディーンハイム。ヘスティア・ファミリアの団長だ。別にオレの許可など要らないが、オレはオレが認めていない奴に支援するつもりも、手伝うつもりもない。だから、ヘスティアにとってお前が認められたことが、正式に入団した扱いになるんだろう」
「そういうことだよ。キャロル君の支援があるなしじゃ、全然違うからね」
「というか、ヘスティア様は知っていたのですか？　キャロルさんがこのようなことをするなんて……」
「知らないよ。でも、ボクが入団を認めた子がすぐに入団の取り消しを頼んできたことが何回もあったから、キャロル君が何かしているんだろうとは思っていたけれどね。ちなみにどんなのだったのかな」
「ミノタウロスのゴーレムをぶつけた」
　あれ、ゴーレムだったんだ。凄く怖かったんだけど……
「キャロル君！」
「安心しろ。今回なら他にも色々と合格条件は設定しておいた。オレが犯人だとわかれば合格にしたし、もちろんミノタウロスを倒してもいい。他にもあるが、他の連中はオレが一切支援しないし、オレが稼いだ金がファミリアに入る事もないといえばほとんど諦めたな。それ以外はオレの情報を探ったり、陥れようとする連中だった」
「そっか。それならわかったよ。でも、キャロル君の試験を突破する人なんて滅多に出ないと思うよ？」
「別に問題ない。ベルには別の奴をつける。そいつと一緒なら騙される事などないだろう。後で紹介する」

「わかったよ。じゃあ、ベル君。まずは帰って傷を癒そうか」
「その前に説教だ」
「え？」
「お前、ロキ・ファミリアに助けてもらった時と豊穣の女主人から逃げただろう。明日、ロキ・ファミリアにいるアイズと豊穣の女主人のミアに謝りに行くぞ。ヘスティアも来い」
「わかったよ。でも、話はシスターちゃんから聞いたけど、そのベートって奴は……」
「それならオレが仕置きをしておいたから安心しろ」
「そうなんだね。ならいいか」
「ああ」
　二人が話している間に心配かけた人達に謝りにいく。それから四人で街を歩いて帰るけれど、こんな小さな子が団長なんて驚いた。それにミノタウロスを作りだす魔法なんてすごい。
「あ」
「どうしたんだい？」
「この短剣なんですが……」
「ああ、それか。入団祝いにくれてやる。使うといい」
「いいんですか！　ミノタウロスを大きな剣を触れただけで粉砕するなんて、凄かったですよ！」
「キャロル君、これって……」
「哲学兵装・ソードブレイカーだ。剣と定義されたものはなんでも折る事ができる」
「それ、とんでもない武器じゃん！　どう考えてもレベル1に与える武器じゃないんだけど……」
「ただの入団祝いだ。いらんのならいいが？」
「神様……」
「緊急事以外には使わないように。それと無くさないようにね。ぶっちゃけ、それだけで億単位する武器だから」
「えええええええええええ！」
　それだけで、ボクは短剣を落としそうになる。慌ててキャッチした

ボクは大事に使う事に決める。返そうとしても武器がないし、仕方がない。
「ベルさんは騙されやすいみたいですから気をつけてくださいね」
「は、はい」
「ん？」
「何か騒がしいな」
　大聖堂で子供達が騒いでいた。ボク達が中に入ると、その子達は水の蛇に咥えられたり、お手玉にされて遊ばれていた。中には泣いている子供達もいる。
「なんですかこれ！」
「助けないと！」
「キャロル君お願い！」
「必要ない。居るんだろう。出て来い、ガリィ」
「は～い☆」
　水の蛇が場所を移すと、奥にある大聖堂の教壇が見えてくる。そこに座ったメイド服の様な青い服を着た女の子が居るのが見えた。彼女は表が黒色で後ろが青色の不思議な髪の毛をしている。
「マスター、こいつらから想い出を吸えばいいですか～？」
「必要ない。そいつらはオレが保護している連中だ。解放してやれ」
「りょーかーい！」
　そんな彼女が指を鳴らすと、全ての水の蛇が崩れてただの水となり、彼女の身体の中へと吸い込まれていく。そして、彼女はこちらにてくてくと歩いてきて、ボク達の目の前でスカートを摘まんで挨拶をしてくる。
「オートスコアラー。形式番号ＸＭＨ―０２０。終末の四騎士（ナイトクオーターズ）、ガリィ・トゥーマーン。マスターのご慈悲により、再びマスターにお仕えできて大変うれしく思います」
「ああ、よくぞ戻ってきた。歓迎しよう」
「ありがとうございます。ガリィ、これからマスターのおそばでがんばりま～す☆」
「で、先のはなんだ？」

「遊んであげてたんですよ～。マスターが庇護する子供達にガリィが、危害を加えることなんてありませんよ～。ソイツラガマスターニ危害ヲ加エナイカギリハ～☆」
「そうか。改めて紹介する。こいつはガリィ。オレに仕えている存在だ」
「よろしくお願いしますね～☆」
「は、はい、よろしくお願いします！」
「ヘスティア、ガリィにファルナを刻んでくれ」
「わかったよ」
「え？　嫌ですよ？」
「ガリィ？」
「ガリィはマスターのものですから、ヘスティアに仕える気はありません～ん」
　クルクルと踊りながら、神様にそんなことをいう彼女。皆が呆れている中、キャロルちゃんが何かを考えている。
「そうか。まあ、別にファルナなどいらんか。その方が都合がいいしな」
「でも、ダンジョンに入れないんじゃないかな？」
「それは大丈夫だ。なにせ、ガリィは人ではないからな。武器や道具を持ち込むのにファルナが刻まれているかどうかなど確認せんだろう」
「「え？」」
「改めまして。ガリィはガリィ・トゥーマーン。マスターに作られた自動人形で～す☆」
　おじいちゃん。助けた女の子が実は団長で、試験だったと思ったら……今度は女の子だと思った子が動く人形だったよ。オラリオって不思議がいっぱいだね！

第9話

ガリィが無事に蘇った。これで一先ず、オレの目的だったオートスコアラーの復活が一部だが、完了した。
「これで別れよう。集合は明日の朝だ」
「わかりました」
「おやすみなさい」
「ベル君、ステータスの更新をしてあげるよ」
「お願いします」
「私は子供達の様子をみてきますね」
皆と別れてシャトーの地下へと移動した。当然、オレの後ろにはガリィがついてきている。
「さて、ガリィ。お前はどこまで記憶している？」
「もちろん、私達がマスターであってマスターでない人を助けたところまでです」
「エルフナインか」
「はい。後はマスターがこちらに来てからの記憶ですね」
転写させたから当然だな。
「で、ガリィはどう思う？」
「この世界の事ですか？　それとも、前の世界がどうなったかですか？」
「待て。この世界だと？」
「マスター、答えていいなら答えますが……」
「答えろ」
「畏まりました。では、マスター。マスターの考えている私達が居た世界が巻き戻ってこの世界になったというのは間違いだと思いますよ～」
「何？」
「いいですか、マスター。もし巻き戻っていたのなら、全人類はシェ

ム・ハの端末のままとなります。ですが、解析した時に調べた結果、そのような情報はありましたか？」
「無かったが、途中で失敗したのではないか？」
「その可能性がありますが、それだとこの世界に降りてきている神々の説明がつきません」
「移動して奴等が戻ってきて討伐したのではないか？」
「その可能性もありますが、ダンジョンとか明らかに意味不明でしょう。ましてや神力があるのにそれを使わないのですよ？　それって私達の世界とは違いすぎますよね？」
「それは……そうだな。法則が変わり過ぎているし、確かにダンジョンは異質すぎるか」
　ファルナを与えてダンジョンを探索させるより、自らの力でさっさと滅ぼした方がいいだろう。もしくは、楽しむためか。
「どちらにせよ、情報は足りないな」
「はい。ですから～もう一度、万象黙示録を作ってみませんか」
「世界を分解すれば確かにこの世界の事を理解できるか。だが、問題はある」
「はい。世界を分解しようとすれば確実に邪魔されるでしょうね～」
「立花響達のようにか」
「ですね～。アルカノイズを用意すればどうとでもなります。マスターなら作れますよね？」
「可能だ。まあ、万象黙示録を完成させるにしても、シャトーを作り直さねばならん。素材はその辺に転がっているとしても、まずは残りの三体を復活させるのが最優先だ」
「レイアちゃん達ですね～」
「そうだ。しばらくは情報収集と聖遺物……力ある物の収集を優先し、戦力を集める」
「では、ダンジョンですね」
「そうだ。ダンジョンを滅ぼした後、神々を消滅させる。ウルクより分かたれた歴史を再現させる必要もあるかもしれないな」
「どちらにせよ、時間がかかるのですから、今ある世界を楽しみましょ

うよ、マスター☆」
　オレに抱き着いてきたガリィに溜息をつきながら、立ち上がって寝室に移動する。
「何故ついてくる」
「嫌ですねマスターったら。一緒に寝るからに決まってるじゃないですか～」
「……勝手にしろ」
「は～い。ガリィの勝手にします～☆」
　ガリィに抱きしめられながら眠りについたが、体温が冷たくて気持ちが良かった。

◇

　目が覚める。身体を起こして周りを確認すると、目の前に意味不明な光景が広がっていた。
　いや、理解はしている。何せ元凶が目の前で鎮座しているのだから。
「おはようございます、マスター」
「ご飯にしますか？　それとも、が・り・ぃ？」
「……」
　周りを見ると七人のガリィがそれぞれ活動している。掃除をしたり、オレが知らない間に設置されているキッチンでお茶を入れていたり、オレの服を出してきたり、好き勝手に行動しているようだ。それに掃除は水を出して洗い流している。水が通った後は綺麗に光り輝いているな。
「馬鹿な事を言っていないで、それはなんだ？　材質は水のようだが……」

「水を使った分身ですよ。もっとも、前に使っていた分身とは違うのですけれど」
「ですので、雑用はガリィにお任せで～す☆」
「そうか……」
鬱陶しいのが増えたか。少し力を与え過ぎた可能性もあるが……致し方あるまい。
「それよりも朝食を食べにいく。お前はどうする？」
「もちろん、ついていくに決まってるじゃないですかぁ～」
ガリィがクルクルと回りながら指を鳴らすと、分身達が崩れて水に戻るとガリィの中に入っていく。オレが立ち上がると、ガリィが寄ってきて服を脱がせていく。脱いでから貰った新しい服に着替え、外に向かう。

◇

ファミリアでシスターが作った朝食を食べる。食事をしている間、ガリィは子供達に強襲されて、子供を踊るようにしながら掴み、次々と上に投げては水に突っ込んでいる。一応、殺さないようにはしているので放置する。
「あの、大丈夫なんでしょうか？」
「危ないと思いますけれど……」
「ああ、問題ない」
シスターとベルの言葉に答えながら朝食を食べ、ロキ・ファミリアへと向かう準備をする。準備ができたら、オレとガリィ、ベルとヘスティアで向かう。

ロキ・ファミリア。屋敷に住んでいるが、オレ達が住んでいるとこ

ろと似たような大きさだ。門の前にはオレの所とは違い、しっかりと門番が立っている。まあ、オレの所は戦闘用ゴーレムなのだがな。
「ヘスティア・ファミリアだ。ミノタウロスの件でアイズ・ヴァレンシュタインに会いに来た。取り次いでくれ」
「畏まりました。少々お待ちください」
オレが話している間にベルは顔を真っ赤にして逃げだそうとしているが、嫉妬したヘスティアに抱き着かれている。それをガリィは楽しそうに見ている。
「あなたはそのアイズなんとかが好きなんですか？」
「そっ、それは……」
「ガリィ、気になります☆　なんなら、マスターと同じファミリアのよしみでお手伝いしてあげてもいいですよ～？」
「止めるんだ！　ベル君はボクの物なんだからね！」
「あらあら、これはとてもいい感情ですね……ふふ」
ああ、玩具に選ばれたようだ。
「お待たせしました。ご案内いたします」
「頼む」
さて、どうするべきかな。

◇　ガリィ

館の玄関までやってくると、ロキ・ファミリアと呼ばれる連中がガリィ達の前に並んでいて、迎えれてくれた。そいつらは人間じゃないのも含まれていて、美味しそうね。特にハイエルフの女。思わず舌なめずりしちゃう。
「っ!?」
他には金髪の餓鬼みたいな奴とドワーフ。それに褐色の肌の女。そいつはマスターを睨み付けてきている。こいつは殺してやろうか？

「いらっしゃい。歓迎するよ。それで要件はアイズとベートに関してかな？」
「そうだ。アイズにうちの団員が世話になったからな」
「わかった。二人で話している間に色々と決めないといけないからね」
「いいだろ」
「駄目ですよ団長！　この女狐と二人っきりなんて何かがあったらどうするんですか！　襲われますよ！」
「ああん？」
　この褐色の女……マスターに暴言を……それにこいつの視線は金髪の子供みたいな奴だけだ。さてさて、どこまで引っかき回すか。ガリィはマスターの命令を聞きつつ、自分の楽しみもちゃんとやりますし……よし、ガリィ決めました。
「マスター、お話の前にガリィを紹介してくれないんですか？　挨拶をしたいんですけど……」
「は？　お前が、挨拶……だと？」
「マスター、ガリィは淑女ですよ？」
　凄く嫌そうな表情をしながら、マスターが場所を譲って首で指示をしてくる。ガリィは満面の笑みで返すと更に嫌そうにしました。解せないですね。
「その子は見ない子だね。ヘスティア・ファミリアの新人かな？」
「お初にお目にかかります。ガリィはガリィ・トゥーマーンといいます。是非、ご挨拶をさせて欲しいのですが、よろしいですか？」
「ああ、構わないよ」
「では、失礼しま～す☆」
「っ!?」
　瞬時にするっと滑って接近し、金髪に口付けをして舌を入れる。たっぷりと舌と舌を絡めて想い出を薄く広く回収し、戻す。その瞬間、金髪に吹き飛ばされて距離を取る。
「てめぇっ！　団長に何しやがる！」
「何って、聞いてませんでした？　挨拶よ、あ・い・さ・つ。先程の事

もわからないなんて、頭は大丈夫？」
「よくも団長の唇を！　し、しかも舌なんて入れるなんてうらやま」
「クスクス」
　ペロリと舌を舐めて彼女が発する嫉妬の感情を頂いていく。とても美味しいし、ガリィ感激です☆
「フィン、大丈夫か？」
「あ、ああ……驚いたね」
「それで、本当に挨拶なのか？　アマゾネスでもあるまいに」
「挨拶よ？　ねえ、マスター」
「知らん。オレを巻き込むな」
「あらあら、本当にガリィなりの挨拶なのに」
「なら、私とだってできるよな！」
「ええ、できるわよ。こんな風に」
　褐色に近付いて両手で肩を持ち、身体を上げてキスをしようとすると、必死に止めてきた。なので、そのまま下がる。
「あらあら、今キスをすれば関節キスになったわね」
「っ!?　だ、団長とか、関節キス！」
「でも、拒否されましたし止めておきましょう。異性の唇に触れたのなんて嫌みたいですしね」
「そ、それは……」
「おや、どうしたのかしら？　ガリィは気にしないけど、好きな殿方ではない人とキスをするのなんて嫌だものねえ」
「私は、私は！　団長の事を「嫌い」……」
「だって、拒否したんだもの。ふふふ、残念だったわね。振られちゃったわよ？」
「お前えええええええええ！」
　激怒した表情で突撃してくる褐色にとっても楽しい気分になりながら唇を舐めてわざと吹き飛ばされるため、身体から力を抜く。ここで殴り飛ばされれば、今後の交渉にとっても便利だもの。何せ、こちらは許可を貰って挨拶をしただけ。この許可がとても大事なのよ。許可を得ているのに殴り飛ばされたとなれば非は明らかにあちらに

ありますし。
「止めるんだティオネ！」
「止めろ！」
　直前まで迫った拳にこのままだと止まりそうなので、自分から目を瞑ってわざと吹き飛ばされるように飛んで倒れ、尻もちをつく。そして、涙を溢れさせて彼等をみる。そして、怯える表情を作ると、すぐに白いのが私の前に立って両手を広げた。ニヤリと笑いそうな表情をしながら、白いのの服を掴んで頭を押し付ける。
「ティオネ！　君は……」
「私、殴る前に止めました！　でも、こいつ……」
「酷いです！」
「いや、ベル君……彼女は……っ！」
　ヘスティアの周りに漂う空気中の水分を利用して喋れなくしてやる。邪魔されるのは困りますのよ？
「何事や」
「ロキ、それが……」
　説明を聞いていくロキにガリィは嘘をつかないように倒れたとだけを伝える。ガリィの嘘も分かるのか判断できませんもの。
「ティオネ」
「私はやってない！　ちゃんと団長の言葉で止めたわ！」
「ああ、やってないみたいやな。嘘やない。で、嬢ちゃん。自分から飛んだんか？」
「ガリィは倒れたのよ！」
「そうやな。自分で倒れたんやもんな。嘘にならんように答えておるやろ」
「おまえ！」
「確かに怖くて自分から倒れたかもしれませんが、それがガリィが襲われた事になんら……」
「もういい。ガリィ、遊びは止めろ」
「はぁ～い☆　マスターが言ったので止めま～す」
「え？」

立ち上がって服の汚れをはたいていく。もちろん、涙を拭うのもしないし、ヘスティアにしていた対処も解除する。
「ぷふぁ！　死ぬかと思った！」
「神様！」
「さて、紹介は終わったな。ガリィはこういう奴だ」
「酷いですよ、マスター。ガリィをこう作ったのはマスターなんですよ？」
「ふん。さて、案内しろ」
「ああ」
ロキ・ファミリアの建物に入り、会議室に移動しました。そこでマスターとヘスティアが座り、ガリィは後ろに控えています。
「で、要件はアイズだったね。呼ぶから待っていてくれ。それで先程の件だが……本当に挨拶がアレなのかい？」
「ガリィにとってはそうなんだろう。オレは知らん」
「なあなあ、それやったらうちにもキスしてくれへん？」
「いいわよ。大歓迎」
「ほな……」
「サービスで壁ドンまでしてあげるわ」
「おお！」
口付けをして舌を入れ、ロキの舌と絡め合わせて想い出を回収する。目的はヨルムンガンドとフェンリルの作り方。レーヴァテインについても知りたい事が多々ありますの。その想い出を引き出していくと、思いっきり蹴り飛ばされた。
「お前っ！」
「ロキ？」
「ヘスティア！　お前は何考えとんねん！」
「ど、どうしたんだよ！　いきなり怒られてもわからないって！　キスは君が望んだことだろう！」
「わかっとらんのか！」
「わかんないさ！」
「じゃあ、お前か、キャロル・マールス・ディーンハイム！」

「ガリィ」
「ガリィにはロキが何を怒っているのかわかりませ～ん」
「だ、そうだ」
「お前、こいつがなんなのかわかっとるやろ！　こいつは……」
「おっと、そこまでよ。それ以上を告げたら、全面戦争。その引き金を引く気はあるのかしら？」
　ロキを見てから、彼女の子供達を見てペロリと舌を舐める。それで理解してくれたようでなによりです。ガリィはこういう手合いを止める方法もしっかりと心得ているの。
「ちっ、お前がアレやったら、確かにまずいな……で、キャロル。お前、自分が何をしたのかわかっているんやろうな？」
「オレはダンジョンに落ちていた物を拾って、それを使っただけだ。冒険者にとってなんら間違った事はしていないし、犯罪でもない。ダンジョンからドロップアイテムを持ち帰ってきたのが犯罪というのなら、冒険者全てが犯罪者だ。違うか？」
「ちっ、後始末はちゃんとしたんやろうな？」
「ああ、もちろんだ。それにガリィはオレのコントロール下にある。何も問題ない」
「嘘じゃないようだな」
「本当ですよ。ガリィはマスターの命ならば全てを沈めて滅ぼしますが、マスターが望まないのならやりませ～ん☆　面倒ですし」
　くるくると踊りながら告げてあげると、苦虫を噛み潰したような表情していますが、問題ありませんね。
「ロキ、説明してくれ」
「できん。そろそろアイズたんも来る」
「わかった」
　少しすると、金髪と銀髪が入ってきた。二人はまるで姉妹みたいに似ているの。マスターから頂いた記憶にはないけれど、こいつらがアイズと、その妹かしら？
「ベートも一緒か。まあええ。で、目的はアイズたんにお礼やったっけ？」

「ああ、そうだ。ベル」
「は、はい！　こ、この間は助けてくれてあ、ありがとうございます！」
「うん。私の方こそごめんね」
「いえ、こちらのほうが……その、逃げてしまって……」
　ああ、こういうのを見ているとぐちゃぐちゃに掻きまわして潰したくなりますが……やっちゃっていいですかね？
「てめぇっ！　オレの身体を元に戻しやがれ！」
「ベート」
「えっと、元にって……」
「ああ、こいつはオレが団長をしているファミリアを貶したからな。その罰としてそいつが好きだったアイズの幼い姿にしてやった」
「ああ、それは素晴らしい考えですね！　流石はマスターです！　ガリィ、とっても感激しました☆」
「ふざけんなぁああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「落ち着けベート」
「そうや、ええやんその身体」
　さて、こいつはマスターを貶したということですね。ファミリアが貶されたという事は団長であるマスターの顔に泥を塗ったというわけですし、もうちょっと虐めてやるか。
「そんなにその身体が嫌なら、ガリィが元に戻してあげましょうか？」
「なに？」
「マスターほどではなくても、ガリィにもできますしねえ～。いいですか、マスター」
「好きにしろ。オレは関与しないからな」
「はぁ～い☆」
「本当か！」
「もちろん、無料じゃないですよ。ガリィと勝負をしましょう。勝った方が相手と相手の関係者になんでも命令がくだせること。これにしましょう。そちらは二人で、ガリィは一人でいいですよ」
「なめてんのか！　やってやる！」

「ベートまっ！」
　ロキはヘスティアにした方法で黙らせる。これでいい。
「うるせぇ！　オレは男の身体に戻るんだ！」
「そっちのほうが可愛いのに……」
「うるさいうるさい！」
「いいわよ。私もそいつを殺してやる」
「デットオアアライブが目的ですか。いいですよ。じゃあ、ルールは互いが相手の降伏を認めるか、死んだ場合が勝利ということでいいですね」
「待て！　それは認められない！」
「そうじゃな。せめて殺すのはなしじゃ」
「うん。殺すのは駄目だよ」
「じゃあ、相手が相手の降伏を認めたら終わりですね」
「いいわよ。ボッコボコにしてやる！」
「やってやる！　覚悟しやがれ！」
　さて、どうやって嬲ってやろうかしら？　ようは殺さなければいいのだし、手足を捩いでゆっくりじっくりと溶かして悲鳴を聞くのもいいかも。とりあえず、遊んであげて希望を与え、次に絶望に叩き落してあげようかな。落差が激しければとっても楽しいことになるはずよねぇ。泣き叫び、壊れて行く様をガリィにみ・せ・て・ちょ・う・だ・い☆

第10話

ガリィがロキの眷属と訓練所に移動していく。オレはロキを見詰めていると、奴は苦しそうに何かを喋ろうとしているが、水が邪魔をして喋れないでいる。いや、それだけじゃないな。ロキの姿は水を利用した幻術で誤魔化しているので、他の連中は気付いていない。

「ボク達も行こう」

「ああ、さっさと移動するぞ」

全員で移動するが、ロキはオレの服を掴んで必死に何かを伝えようとしてくるが、無視する。

訓練所に移動すると、ガリィがティオネと駄犬の二人と対峙する。ティオネだけが完全装備だ。駄犬は装備の大きさが合わないからだろう。

「さあ、始めるわよ」

「覚悟しなさい」

「ぜってぇ、勝つ！」

準備は出来たようなので、戦いを開始させよう。

「始めろ」

「ガリィ、がんばりま～す☆」

ガリィがこちらに向けて手を振りながら声を出すと、その隙を狙ってティオネが反り返った短剣、ククリナイフのような物を使って斬りかかっていく。

「わっ、ひゃぁっ！」

ガリィがしゃがみ込み、ティオネの攻撃を回避する。しかし、即座にもう片方のククリナイフを振り下ろしてくる。それをガリィは後ろに倒れるようにしながら、ククリナイフの柄頭を蹴り上げて軌道をずらし、両手を地面についたガリィはその場で足を広げて回転する。

「ちっ」

ティオネがバックステップで下がると、上から駄犬が蹴りを放ってくる。ガリィはその場で身体を横回転させて立ち上がると同時に駄犬の足を掴んで地面に叩き付ける。同時に股間に思いっ切り拳を叩き込んだ。
「あ、女になっていたのね。ここ、あんまりダメージがないわね。女になっていてよかったわね」
「てめぇっ！」
ガリィが足で起き上がろうとする駄犬の頭を踏みつけ、上げては踏みつけを繰り返す。
「うわぁ……」
「幼いアイズを踏みつけるとは……」
「しかも、足をどけて頭を上げさせた瞬間にまた踏みつけているね」
「外道めっ！」
「アイズたんに何すんねん！　あ、喋れた」
「私じゃない」
ティオネがガリィに何かのスキルを使いながら接近していく。ガリィは駄犬を踏みつけながら、ククリナイフの腹を殴って弾いていく。
「しかし、あの姿から戦えるとしても魔法使いだと思ったが……まさか格闘タイプだとはな」
「凄いです……ティオネさん達が相手になってないです」
「いや、アレは……」
「鬱陶しい！」
ティオネがククリナイフから手を離すことでガリィに隙を生み出し、両手の拳でガリィの腹を殴りつける。ガリィはそれによって吹き飛ばされ、更に追撃としてティオネが追いついて蹴りを放つ。それを受けたガリィは何度も地面をバウンドしながら木に激突して止まる。
「大丈夫か？」
「止めた方がいい？」
「いや、必要ない」
アイズ達が止めるかどうかを聞いてくるが、必要ない事を告げる。

ガリィは痛そうにしながら起き上がり、地面に手をつきながら尻もちをついた状態で怯えたような表情をしながらティオネを見詰める。
　ティオネは駄犬が立ち上がるのを待ちながら息を整える。駄犬は起き上がると、身体を確認していく。
「ベート、あんた……」
「身体が違うんだよ！　レベルも下がってる。スキルとアビリティはかわんねえが、リーチや衰えた力の差はでけぇ……」
「それもそうね。アンタはアタシのサポートをしなさい」
「ちっ、しゃあねえな……でも、これで終わりか？」
　オレはガリィを見るが、怯えた表情をしているが、口を動かしながらゆっくりと立ち上がっている。
「負けを認めなさい。そうしたらこれ以上痛い目に会わなくていいわよ」
「ガリィの……」
　ガリィがぼそぼそと呟くだけで、ティオネやオレ達には聞こえていない。そこにティオネが接近していく。
「何、聞こえないわよ？　さっさと負けを認めなさいよ。弱い者虐めをしているところなんて団長に見られたくないの」
「い・や・よ。ば～か」
「っ！　そう！」
　耳を近づけたティオネにオレ達に聞こえるように叫び、ティオネが拳を叩き付ける。
「馬鹿野郎！」
「え？」
　駄犬がティオネを蹴り飛ばす。無防備に受けたティオネは吹き飛ばされ、先程まで居た場所を地面から生えた出た水の槍が貫く。
「残念ね。せっかく油断したところを串刺しにしてやろうと思ったのに」
「水の槍……魔法か」
「助かったわ、ベート」
「油断するな。コイツは……」

「下衆なのね」
「ひっどーい☆　ガリィ、悲しくて泣いちゃいます。え～ん、え～ん」
　起き上がり、スカートの裾を叩いてから泣き真似をするガリィ。
「やはり魔法使いか。しかし、ティオネ達は後でお仕置きだな」
「詠唱を見逃すのは頂けない」
「あの格闘技術は凄いのお」
　ガリィがブツブツと呟いていたのは詠唱と誤認させるためだ。そして、一度詠唱してしまえば派生と言い張るつもりだろう。
「魔法を使えたとしても詠唱に時間がかかる。その前に狩るぞ」
「ええ。でも、並行詠唱ができると思った方がいいわ」
「並行詠唱？　そんなもの、もう必要ないの」
「なに？」
　ガリィが両手を広げて踊りだす。同時に空中から無数の水の槍が降り注ぐ。空気中の水分を錬成し、遥か上空から落とすだけの簡単な技だ。しかし、重力によって加速した水の槍は相応の火力を得ることになる。
「あたればそれで終わりよ。精々頑張ってね。ガリィ、応援しているわ」
　降り注ぐ槍は地面に着弾するとクレーターを作り出し、水溜りを作りだす。そんな物が馬鹿みたいに降ってくるのだから、二人は必死に回避していく。
「さあ、ガリィと一緒に踊りましょう☆」
　必死の形相で回避する二人を楽しそうに、本当に楽しそうにみている。
「これは凄まじいな……レフィーヤ並みの魔法だ」
「そうだね。まさかここまでの強さがあるとは……」
「フィン、親指はどうだ？」
「さっきから疼きが止まらないよ」
「そうか……それならまだ大丈夫そうやな」
「ねえ、ベル君、キャロル君。あの子、すご～く性格悪いね。最初から魔法で戦っていないし」

「そ、それは……」
「アイツは性根が腐っているからな」
　二人は必死に避け、余波で吹き飛ばされたり、ダメージを負ったりしながら魔法を発動してから一切動かないガリィに接近し、二人で同時に攻撃を仕掛ける。
「無駄な足掻きだな」
「何いうとんねん！　魔法で動けんアイツは二人の攻撃で……」
「それが無駄な足掻きだと言っているんだ」
　水の槍で防がれながらも前と後ろに別れる。それから、前後同時に襲撃を行う。槍によって髪の毛や皮膚を削ぎ落されながら接近し、血飛沫と共にガリィの身体をティオネが殴り、ベートが蹴る。二人の手と足を使った攻撃は恐怖を浮かべるガリィの身体に吸い込まれ――
「「「え？」」」
　――崩れた水によって絡め取られる。そう、ガリィの身体は水になって二人を拘束した。
「攻撃が命中したと思った？　ざ～んね～ん！　それは水面に映るガリィの幻影で～す☆　やっぱり、勝てると思った時に浮かべた希望をばっさりと刈り取るのが最高よねぇ～」
　ガリィは近くの壁にあった掲げられているロキ・ファミリアの旗に座りながら、足をぶらぶらさせていた。ガリィの手には紺色に輝く聖杯が握られ、それを揺らして中身を飲んだりしている。
「何時の間に……」
「水の槍を盛大に降らせた時だな。着弾する時に発生する水飛沫に隠れて移動したんだろう」
「凄い。これが一流の冒険者の戦い……」
　さて、拘束された二人だが、こちらはかなり悲惨だ。
「ベル君は見たら駄目！」
「男共の視線を隠せ！」
「くそっ、離せっ！　やめっ、ろぉっ！」
「なっ、なにこれっ、やっ、やめっ！　おごぉっ!?」
「止めるわけないだろ、馬鹿が」

ガリィは拘束した二人に水でできた触手を生み出し、水で作った十字架に拘束する。更に身体に触手を這わせ、口にも入れていく。二人の服はすでに水の槍によってボロボロなので、どう見てもアレにしかみえない。
「ああ、安心してくださ～い。ガリィ、良い子なので二人をとっても気持ち良くして、蕩けさして溶かしてあげるから」
口に入れられた触手が脈動し、二人から想い出を吸いだしていく。駄犬の尻尾がピンと立っているが、それも絡めれられている。
「そこまでだ！　これ以上は認められない！　二人の負けだ！」
「何を勘違いしているの、お馬鹿さん？　ガリィは言ったはずよ。相手が降伏を申し入れ、申し入れられた方が認めた場合とね。もちろん、ガリィは認めないし、この二人も喋れない。だから、このまま延々と苦しみもがいていくの」
「「っ!?」」
他のロキ・ファミリアが戦闘準備をしだすと、ガリィがそちらを睨み付けて指を鳴らす。すると水の龍が複数現れ、ガリィの前に陣取る。
「キャロル君！　止めてくれ！」
「このままだと戦争になるで！　うちかって子供を殺られて黙ってられんぞ！」
「はっ、くだらない。だいたい、てめぇら……私の、私達のマスターを侮辱しておいて無事で済ませられると思うなよ」
「それはベートの身体を作り変えたことで……」
「確かにマスターはそれで許した。でも、コイツはマスターの慈悲で生かしてもらっていたのに、戻せとか言ってきたの。反省しないわる～い子にはお仕置きが必要って、ガリィはちゃんと知ってるの。だから、手足をじわじわと溶かしてダルマさんにしてあげるわ」
「まって！　ティオネは関係……」
「は？　コイツ、マスターがそこの餓鬼に興味もないし、付き合うことはないっていってんのに絡んできて暴言吐いてるでしょ。それも治らない。だから、こいつも一緒に身の程ってのを教えてやるわ」

ガリィが作り出した水の龍が口から垂らす液体は毒物のようで、地面がじわじわと溶けている。それに訓練所のクレーターは大きくなって池のようになったようだ。水深もかなり深いな。それに気付かなければ、水中に立っているガリィに突撃した瞬間、こいつらは終わる。
「きゃ、キャロル君！　流石にやりすぎだよ！」
「か、かわいそうですよ！」
「ふむ」
オレは懐中時計を取り出して時間を確認する。もうそろそろ時間だな。
「ガリィ、そいつらの口を解放して負けさせてやれ」
「マスター？」
「お前の遊びに付き合っている時間はない。次の予定が入っているんだ。くだらない事をしていないで行くぞ」
「聖杯に想い出は満たされて、生贄の少女は解放される。仕方ないですねぇ。貴女達、負けを認めるならここで止めてあげる。マスターに感謝なさい。あっ、ガリィとしては負けを認めなくてもいいわよ？生かせばルール上、何の問題もないのだから、両手両足に加えて両目を潰せばいいですしね～」
「ティオネ、ベート。負けを認めるんだ」
ふと視線を見れば、フィンの指が複数折れている。自分で折ったのかはわからんな。
「団長……」
「ここで君達を失うわけにはいかない」
「わかりました。私の負けよ！」
「くそガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ!!　オレの、負けだ」
「ふふ、じゃあ、認めてあげます。あ、それと命令できる権利でガリィはアイズ・ヴァレンシュタインの改宗を要求しま～す☆」
「？」
「「え」」

「「「「えええええええええええええええええええええええええええええ！」」」」
　オレとガリィ以外の全員が叫び声を上げる。いや、指定された本人もよくわかっていないようだ。
「あれ、何を驚いているのよ、ベル。あなたの為に選んであげたんだけど」
「え、え、まさか、それって……」
「クスクス」
「待て！　待って！　ボクは認めないぞ！　ヴァレンなにがしなど要らないからね！」
「ざんね～ん！　ヘスティアに決定権はないの」
「ボクのファミリアなのに！」
「……仕方ないわね。だったら、メイドとしておきましょう。アイズ・ヴァレンシュタインを手に入れるのはガリィが正当な賭けで手に入れた権利だから、問題ないし。勝てていたら、こちらも同じように願いを叶えてあげたし、ガリィはなにも悪くありませ～ん」
「悪いよ！　ボクにとっては最悪だ！」
「ベルにとっては最高よ？」
「～～～～！」
「あはははは、いいわよ！　その表情と感情！　とってもいいの！」
「……キャロル君！」
「言っただろう。性根が腐っていると」
「あ、ロキ・ファミリアの皆さん。渡さないと――色々と楽しみにしてね☆」
　どうせろくでもない事だろう。どうでもいいな。今回はガリィの戦力調査がメインだ。戦いを見た限りでは問題はなさそうだが、一度戻ってオーバーホールをして確認した方がいいだろう。まあ、その前に豊穣の女主人だな。
「マスター、ガリィがんばりましたよ。褒めてください！」
「頑張ったのか？」
「そうですよ。すっごく、すご～く手加減したんですよ！　水の槍を

作ろうとしたら上空に湖が出来ちゃったので、少しずつ使って最後には取り込んで……とっても頑張ったんですよ！」
「……そうか。頑張ったな」
「はい☆」
　ガリィがコントロールをミスったら、今頃オラリオが大惨事だったな。リヴァイアサンの力は伊達ではないか。
「あ、アレで手加減していたの？」
「凄いです！　尊敬します！」
「そうでしょう、そうでしょう！　もっとガリィを褒め称えなさい！」
「はい！」
「べ、ベル君はあんな性根の腐ったようになったら駄目だからね！」
「おい、待てこら。誰が性根の腐ったような存在だって？」
「キャロル君！」
　殺気を込められたヘスティアは即座にオレの名前を叫んだ。
「いやですよもう、マスターったら……そう作ったのはマスターでしょうに」
「うわ、凄い手のひら返し……」
「あはははは」
　しかし、ガリィはどういうつもりでアイズ・ヴァレンシュタインを手に入れるんだ？　彼女のデータは既に採取してある。だから実物は必要ない。欲しければそれこそデータから錬成すればいいだけだ。本人とはいえないだろうが、ガリィの話からしたらベルのためらしい。だが、これは言ってしまえば一目惚れだろう？　だったら、身体が同じならば問題ないだろう。
「マスター、錬金術師としては間違っていないですけど、人としては間違っていますよ？」
「お前がそれを言うのか？」
「だって、ガリィは人形ですから」
「そうだったな。まあ、全てお前に任せる。オレの邪魔さえしなければ構わない」
「りょーかーい！　ガリィ、がんばりま～す☆」

面倒な事した始末はガリィ本人にやらせればいい。ガリィを蘇らせ、５０階層に転移陣を仕込んだ時点でロキ・ファミリアの役目はほぼ終わっている。もはや、深層に行くのに案内は必要ない。
「あ、マスター。キスしましょう」
「は？」
「ちょっと、何言ってんだこいつみたいな目でみないでくださいよぉ。手に入れた想い出をマスターに渡すだけですから」
「ロキからか」
「はい。ミカの強化に使えますよ」
ミカの強化という事は、火だな。ロキが関わっている火と言えばレーヴァテインか。それにガリィの事だから、フェンリルとかの作り方なども奪ってきている可能性がある。これは使えるな。
「よくやったガリィ。褒めてやる」
「わ～い♪　ガリィ、とっても嬉しいです！」
予定を変更してミカから作るのもありかもしれないな。待てよ、アイズ・ヴァレンシュタインをファラの素体にするのは有りか。彼女その物を使えば色々と短縮でき――
『駄目です』
――ちっ、エルフナインの幻聴が聞こえてきた。まあ、確かに多少の手間がかかる程度だ。彼女を使う必要はないな。精々、施設を追加で作る程度だ。オレのクローンも用意しないといけないのだから、そこまで手間ではない。
『――ガリィの暴走――どうに――し――』

第11話

「さて、交渉だったな」
　ガリィがロキ・ファミリアでやらかしてから次の日。ヘスティア・ファミリアにロキ・ファミリアの団長とアイズ。それにロキがやってきた。流石にガリィに任せると面倒な事になりそうだから、オレが出る。
「アイズは渡さんで！」
「と、こちらとしてはお金で解決したい」
「金はあるから却下だな」
　教会にある応接室で三人を座らせて対峙する。間のテーブルにはシスターが入れてくれたお茶とお菓子が置かれている。
「こちらとしての要求はアイズ・ヴァレンシュタインの改宗だ」
「それはドちびが拒否したやろ」
「そうだな。だから改宗は無しだ。代わりにアイズ本人を一定期間借り受けるのと、こちらが彼女にする事に関して黙認をしてもらう」
「酷い事は駄目やで？」
「安心しろ。怪我もさせないし、肉体的にどうこうするつもりはない。ただ、彼女にはうちの新入りを鍛えたり、メイドをしてもらうつもりだ。週４でこちらに来てもらえば残り三日はそちらで好きにしたらいい」
「ふむ。遠征の時は期間が守れないがどうする？」
「遠征の時は除外とする」
「アイズたんのメイド服か……ええな」
　こちらとしても先の戦いで勝利したのだから、強気でいける。問題はアイズ・ヴァレンシュタイン本人の方だが……
「あの、ここに来たら強くなれますか？」
「ああ、間違いなく強くなれるだろう。オレがあの駄犬に施したようにアビリティとステータスを引き継いでレベル１から始めれば尚更強くなれる。こちらに来れば無料で施してやる。それに武器もこち

ら持ちで一級品を用意しよう」
「っ!? それは嬉しい」
「随分と金払いがええやん。何を企んどるん？」
「それを答えるつもりはない。それとこちらの提案を拒否するなら改宗だ。ヘスティアに関してはどうとでもなるからな」
「ドちびぇ……」
「そちらの要求はわかった。アイズ。君はどうしたい？」
「私は……あっちに、ヘスティア・ファミリアに行きたい。でも、皆の所から離れたくもない。だから……」
「そうか。それならそちらの提案を受けるとしよう。ただし、互いのファミリアに居るのは三日として間の一日は休息にしてアイズの好きにさせて欲しい」
「いいだろう」
　相手側もこの辺りが落としどころと思うだろう。罠に気付ているかは知らんが、言った通りアイズ本人には手を出さない。それにこちらがアイズに対する事の黙認はクローンを生み出す事についても含まれている。
「では契約完了だな」
「少し待ってくれ。アイズの事があるから、同盟を組みたい」
「同盟か。それはオレ達にメリットがあまりないから断る。だが、ビジネスの関係なら問題はない」
「……了解した。じゃあ、最後にティオネが謝罪とお願いがあるとの事なんだが、会ってくれないかな？」
「ふむ。ちゃんと話し合ったんだろうな？」
「うん。ちゃんと話し合ったよ」
「ならいいだろう。だが、これは貸しだ。オレがやる事を見逃せ」
「何をする気だい？」
「犯罪ではない。安心しろ」
「わかった」
　どうせ彼女の願いはわかっている。鬱陶しいのが収まるのなら、こちらも問題ないだろう。それよりもロキから手に入れたレーヴァテ

インを作るルーンと環境の再現こそ重きを置かなければならない。
「それじゃあ、外で待っているティオネを呼んでくるね」
「ああ、そちらの要件をさっさと終わらせよう。アイズはこちらの服に着替えて仕事をしてくれ。シスター、頼む」
「わかりました。こちらへどうぞ」
　しばらくしたら、フィンがティオネを連れてきた。彼女はしっかりと謝ってきた。
「ごめんなさい。どうかこれで許してください。私の全財産です」
　差し出された物の中には彼女の武器も含まれている。五千万の価値がある一級品の品だ。それまで差し出してくるのなら、確かに謝罪としてはいいだろう。
「で、これで頼めるか？」
「確かに誠意は見せてもらったから構わん。で、小人族に作り変えればいいのか？」
「是非お願い！」
「レベルは下がるし、リーチがかなり変わるぞ」
「構わないわ。団長と添い遂げるためならなんだってするわ！」
「いいだろう。作り変えてやる」
　アマゾネスの身体データは使える。解析してミカに活かすとしよう。それに小人族にするのなら、小人族もしっかりと調べないといけない。
「あの、その、ちょっとだけ要望があるのだけど……いい？」
「なんだ？」
「肌と顔とかは出来ればこのままがいいの。ティオナと姉妹である証も残したいから……」
「ふむ。それなら可能だ。筋力も圧縮して強靭な状態にしておこう」
「ありがとう！」
　早速、フィンの身体を調べてから、彼の身体と相性がいいようにティオナを小人族に錬成する。スキル、発展アビリティ、魔法を引き継がせ、肉体の筋肉密度を圧縮して作り直す。経験値が大量に犠牲になるが、それでもレベル６であるフィンに近付ける事で駄犬よりは上

手くやれる。錬成が終わり、小人族になったティオネはオレの手を取ってきた。
「ありがとう！　本当に感謝するわ！」
「それはわかったから、さっさとフィンと一緒に帰れ」
「わかった！　ありがとうね！　さあ、団長！　帰りましょう！」
「ちょ、待つんだティオネ」
　フィンがティオネに連れて行かれたので、まだ残っているロキを見る。
「帰らんで。アイズたんのメイド服姿を見るまで帰るわけにはいかん！」
「好きにしろ。だが……丁度いい。ロキには子供達の相手をしてもらおう」
「え？　それはちょっと……」
「知らん」
　鋼糸魔弦でロキを拘束して子供達に玩具として放り込んでおく。これでシスター達は楽になるだろう。まあ、一緒に居るヘスティアと喧嘩するかもしれないが、問題ない。ベルも居るが、そちらは後程連れてくるアイズが居るのだから、やはり問題なしだ。
　オレは地下にある工房に戻り、そこで作業を行う。ガリィがすでに色々と作り上げてくれているので、オレがやる事はほぼない。
「ガリィ、準備はどうなっている？」
「マスター。既に培養槽の設置が終わり、クローンを作る準備は整っています。というか、もう始めちゃっていま～す☆」
　見れば確かに培養槽の中には人が出来つつある。一つはオレのスペアボディ。もう一つには金色の髪の毛をした赤子が漂っている。
「適正は？」
「失敗していますねぇ～。やっぱり風の属性はなかなか手に入りません☆」
「そうか。まあ、何人か作ればいい。そこから適正がある奴を選び出してファラの素体にするか、それともそのまま使うかを選べばいいからな。どうせ人手は足りん」

「ですね～。ファミリアの人数を増やさないと色々と大変ですし。でも変な人が来たらそれはそれで困りますしね。で、どうするんですか？」
「まずはレーヴァテインを作る。必要な素材と方法はある。無いのは環境だけだ」
「環境……たしか、ニヴルヘイムで作られたんですよね」
「そうだ。下層に存在するとされる冷たい氷の国、永久凍土の地獄だな。その環境を疑似的に再現しないといけないだろう」
「つまり、冷凍庫を作るのですね！」
「……まあ、そうだな」
　身も蓋も無い言い方だが、そうだ。絶対零度、―２７３．１５℃の世界を再現し、そこで作成する。普通の人間どころか生物では不可能だ。だが、人でないなら可能だ。そもそも素材からして使うのはロキの血と培養した細胞。それに加えて炉の女神であるヘスティアの細胞、鍛冶の神であるヘファイストスの細胞。この三種類を素材として使うのでかなりの熱量になる予定だ。やはり、レーヴァテインを作るにはダンジョンで行うのがいいだろう。５０階層より下ならば邪魔も入るまい。